

繪本通俗三國志

呂蒙字子明

呂蒙字子明

陸遜字伯說



陸遜



山本刀

繪本通俗三國志目錄

○卷の二十八

玄徳成都を平定せ  
 關羽單刀にして吳の會に赴く  
 曹操伏皇后を殺す  
 曹操漢中の張魯を破る

○卷の二十九

張遼大いに遼道津に戦ふ  
 甘寧百騎曹操を襲ふ  
 魏王宮に左慈盃を擲つ  
 曹操神卜管輅を試む

○卷の三十

耿紀韋晃曹操を討つ  
 瓦口關に張飛張郃と戦ふ  
 黃忠嚴顏魏の兵を破る  
 黃忠夏侯淵を討る

繪本通俗三國志目錄終

繪本通俗三國志卷の二十八

○玄德成都を平定す

馬超已に御方に降り孫乾も漢中より回りければ玄德又霍峻孟達に命じて初めの如く葭萌關を守らせ兵を引て綿竹の城に回り玉へ趙雲黃忠等盡く出迎ふ時に早馬來り只今蜀の大將劉駿馬漢といふ者二人兵を引て攻來ると報じければ趙雲申ける、某願くば此敵を生取んとて馬に打乗り兵を引て出去れり玄德の城中に酒宴を設けて馬超を持参し玉ふ所に趙雲忽ち一將の首を斬て馳回りければ馬超心の内驚き倍々敬みをあして玄德にやける、君の兵を動し玉ふにも及んば某自ら劉璋を呼出し來つて君に降らしぬん萬一早く降らざるば某弟の馬岱と成都を取て君に献つらん玄德大いに喜び盡く酔て退散す去程に蜀の敗軍逃回り劉駿馬漢共に討れぬと告げれば劉璋怖れ驚き門戸を閉て外に出ず時に馬超が救ひの勢來れりと報じければ劉璋喜び自ら矢倉に上りて望を見るに馬超

馬岱塚の邊に馬を立劉璋に逢て一言をすさんと呼わりければ劉璋城の上より何事ぞと問に馬超鞭を以て指揮してやける、我本張魯が兵を領し來て蜀を救ふ處に何ぞ期せん張魯却つて楊松が讒言を信じ謀りて我を害せんとす我此故に劉皇叔に降り汝早く門を開いて降参し民の苦を免れしめよ若迷ひを執て降らずんば我先此城を踏破らんと呼わりて少し退いて陣を取劉璋大いに驚き怖れて魂も天に飛面、土の色の如く昏絶して地に倒れけるを諸人扶けて内に入り劉璋人心地付て我智惠の明かあらざるの悔るども何ぞ及ばん如じ門を開いて降参し多くの民を救へんと云ければ董和やける、是の如くも如何ある事ぞ城中尙三萬の精兵ありて金銀兵糧一年の貯へあり君少しも愛ひ玉ふを劉璋申ける、我父子蜀を治る事已に二十餘年に及べども思徳の民に施すかく、戰ふ事三年にして骸を原野に曝せる事幾許といふ數を知是皆我一人の罪に歸す如じ速かに降参して民の塗炭を救へんと云ければ

聞人涙を流さるのちし時に一人進み出君の言よく天意に合へりと云諸人之を見れば巴西西充國の人に譙周字允南とて能天文を悟る者あり劉璋乃ち汝が意を問んといひければ譙周が曰く某夜天文を考へ觀るに羣星皆蜀郡に聚つて其内大いある星あり光煌々として皓月の如し是乃ち帝王の象あり況んや一年以前に小兒の語を聞に若 要レ吃ニ新 飯一須レ待ニ先 主 來一

と云り此乃ち預じめ兆を告るあり必也天道に逆べからざるに降り玉へと勸めければ黃權劉巴大いに怒り憎き廢備者無用の舌を搦るといふて已に譙周を斬んとぞ劉璋之を推止むる所に一人走り來り只今蜀郡の太守許靖城を踰て降人に出たると告げれば劉璋哭いて已に成都の人盡く傷み悲む次の日立德の幕賓に簡雍といふもの城下に來つて門を開けと呼はると告げれば劉璋門を開いて迎へ入しひ簡雍門に入て背て車より下んどもせず四方を視廻して其体無禮ありしかば一人劍を拔て之を叱り汝鼠輩如何

に志を得たればとて何とて傍若無人の舉動をせず汝蜀の人物を輕んぶるかと云ければ簡雍驚き怖れ慌て車より飛下たり此人の廣漢綿竹の人に秦宓字子勅といふ者あり簡雍急に禮を施し我先生を知せして諷つて無禮をせず幸ひに責らるゝ事おかれと云て共に劉璋に見へければ劉璋自ら上賓の禮を以て厚く敬ふ簡雍乃ち立德の寬弘にして賢を愛し士を好み相害するの意なき由を語りければ劉璋甚だ喜び一夜簡雍を住めて次の日印綬文籍を引渡し共に城を出て降參す立德自ら出迎へ劉璋が手を執て涙を流し我仁義の心なきにあらざるやとせども勢ひ自づから己事を得ざる故ありと云て馬を双べて城中に入玉へば成都の百姓皆香花を捧げて出迎ふ立德府堂に上りて坐し玉へ蜀中の大將 官吏ことごとく階下に拜す其内に黃權と劉巴との門を閉て更に出ざりければ諸大將憤しと怒り行て殺さんとひしめきけるを立德急に下知を傳へ若此二人を害する者あらば必也其三族を滅さんと云玉ひけれ

征西將軍黃忠楊武將軍魏延平西將軍都亭侯馬超之等を始めとして孫乾簡雍糜竺糜芳劉封吳班關平周倉廖化馬良蔣琬伊籍汎々の輩の盡く配すべからず重く恩賞を賜はりて使を荆州へ遣し黃金五百斤白銀一千斤錢五千萬錦一千匹關羽に命つて諸軍に分ち與へさせ牛を宰り馬を殺して大いに士卒を勞ひ倉粟を開いて百姓を賑し玉ひしかば蜀中ことごとく平定して喜び諸人醫家々に滿々たり立德乃ち田宅を分て諸將に賜らんと宣ひければ趙雲諫めて曰く昔霍去病の匈奴の未だ滅びざるを以て將士奚ん予家を爲る事を用んと云り況んや今國家の逆賊其暴虐を必ず事向奴の類にあらば豈田宅を求めて身を安んずる事を望んや必ら走天下 盡く定るを待て其後に郷里に還り本土に耕して身を安んずべし是乃ち其宜しきあり況んや蜀中の人民久しく兵革の亂に遇て田宅ことごとく空虚あり今皆百姓に還し與へて各々業を安からしめ法を定め賦税を出さしめ民の心自然に服せん之を奪ふて私

巴蜀の諸將ことごとく悦服す其後立德自ら門に到りて黃權劉巴を招ぎ玉へ二人其恩を感じ了に出て降參と孔明申けるの今蜀中已に平定せり一國に二君あり速かに劉璋を荆州へ送り玉へ立德の曰く我始めて此國を得たり未だ劉璋を遠く去しめ孔明が曰く劉璋が此國を失ひしに皆其心の墮弱あるに依り君も婦人の仁を以て事に臨んで決し玉のすんば恐くば此國久しく保ち難からん立德實もとて酒宴を設けて劉璋を振威將軍に封じ妻子一族を引具し荆州に行て南郡公安の邊に居住せしめ立德自ら益州の牧を領し降參の大將に恩賞を賜ふて皆名爵を定め玉ふ其人々に前將軍嚴顏蜀郡の太守法正掌軍中良將軍董和左將軍の長史許靖營中司馬龐統左將軍劉巴右將軍黃權其外吳懿費觀彭義卓李嚴吳蘭雷同張翼李恢秦宓譙周呂義雲峻鄧芝孟達楊洪周群費禕費詩降參の文武六十餘人其餘の舊日荆州の大將にも 盡く封爵あり軍師將軍孔明還冠將軍壽亭侯關羽征虜將軍新亭侯張飛鎮遠將軍趙雲

征西將軍黃忠楊武將軍魏延平西將軍都亭侯馬超之等を始めとして孫乾簡雍糜竺糜芳劉封吳班關平周倉廖化馬良蔣琬伊籍汎々の輩の盡く配すべからず重く恩賞を賜はりて使を荆州へ遣し黃金五百斤白銀一千斤錢五千萬錦一千匹關羽に命つて諸軍に分ち與へさせ牛を宰り馬を殺して大いに士卒を勞ひ倉粟を開いて百姓を賑し玉ひしかば蜀中ことごとく平定して喜び諸人醫家々に滿々たり立德乃ち田宅を分て諸將に賜らんと宣ひければ趙雲諫めて曰く昔霍去病の匈奴の未だ滅びざるを以て將士奚ん予家を爲る事を用んと云り況んや今國家の逆賊其暴虐を必ず事向奴の類にあらば豈田宅を求めて身を安んずる事を望んや必ら走天下 盡く定るを待て其後に郷里に還り本土に耕して身を安んずべし是乃ち其宜しきあり況んや蜀中の人民久しく兵革の亂に遇て田宅ことごとく空虚あり今皆百姓に還し與へて各々業を安からしめ法を定め賦税を出さしめ民の心自然に服せん之を奪ふて私

の愛を爲すからせ玄徳實もと悦び孔明を召て國を治むる  
政事を定めさせ玉ふに孔明條例を損益して刑法頗る重か  
りければ法正やけるハ昔漢の高祖法を三章に約して民皆  
其徳を感き願くハ軍師刑法を省いて民の望みを慰め玉へ  
孔明やけるハ御邊其一を知て未だ其二を知せ泰にハ商鞅  
を用ひて苛法暴逆万民ことごとく之を怨む此故に匹夫大  
いに呼で天下土の如くに崩る高祖之に依て寛仁を用ひ法  
を寛かよして天下を治め玉へり今劉璋が闇弱ある父子相  
傳へて累世の恩あり法度ことごとく廢れて徳政舉らず刑  
威肅まらずして君臣の道皆亡ぶ凡そ人之を寵するに位を以  
てして位極る時ハ殘し之を順ふるに恩を以てして恩竭  
る時ハ慢す國の滅亡實に此に由れり吾今之を感ず法を  
以てす法行ゆるハ時ハ恩を知る之を限るに爵を以てす爵  
加へる時ハ榮を知る恩榮共に著ハれ上下心を同じふする  
時ハ國を治るの道斯に於て明あり凡そ政事を治る者ハ  
時に宜しき務めを識て其後に行ふべしと云ければ法正拜

服して退さける此より上下平安君民安堵して四十一州こ  
どどく治り兵を分て守らしめ玉ふ所に忽ち荆州より關  
平來り向に賜ひし金銀等の恩を謝し再拜して關羽が書簡  
を献つる玄徳酒を賜ふて別に關羽が云し事ハあきかと問  
玉へハ關平やけるハ某が父此頃馬超が御方に降りて其  
武藝人の及ぶ者おしと聞て自ら蜀に入て馬超と勝負を定  
めんとすしハ玄徳驚いて關羽若此に來らハ馬超と力を争  
ふて勢ひ必らず兩立せし如何せんと宣へハ孔明が曰く少  
しも妨げおし某書簡を送らハ自づから無事からん玄徳  
心の内關羽ハ性の急ある者あり若速かに來る事もあらん  
と危ふみ孔明が書簡を求めて關平を荆州へ回し玉ふ關平  
夜を日に繼て荆州に回りければ關羽が曰く向にも云し如  
く我今蜀に入て馬超と武藝を比べんと欲す汝兄に見へ  
て此事を語らざりしか關平が曰く軍師の書簡此にあり關  
羽乃ち披き見るに其書に曰く  
亮聞く將軍孟起と高下を分別せんと欲せんと亮を以て之

を度るに孟起文武を兼資し雄烈人に過たり一世の傑士  
關布彭越が徒當に翼徳と並び驅て先を争ふべし猶未だ  
美髯公の絶倫超群あるに及ばず今公任を受けて荆州を守  
據す重からずと爲す倘一たび川に入て若荆州失わらハ  
罪焉より大いあるハ莫し言狂簡ありと雖も以て冀くハ  
明照せよ  
建安十九年秋七月亮頓首拜知  
關羽見了りて其鬚を握り笑つて申けるハ孔明よく我心を  
知りとて書簡を遍く諸大將に示し遂に蜀に入の心を止ま  
りけり

安寧あり未だ兵を動かすべからせ 某 一ツの計事あり手を  
袖にして荆州を取返さん孫權悦んで曰く願くハ關平張昭  
が曰く玄徳が頼とする者ハ諸葛孔明一人あり其兄諸葛瑾  
久しく呉に在て君に事ふ今諸葛瑾の妻子一族を盡く擧  
ぬ捕て獄に下し諸葛瑾を蜀の國へ遣し孔明に遇て此事を  
説しめ若荆州を返さずんハ其妻子一族に至るまで盡く  
殺さんと云しぬん彼二人ハ骨肉の兄弟あり兄の難に遇事  
を知ハ孔明必ず玄徳に告て荆州を返さん孫權が曰く此計  
事好と雖も諸葛瑾ハ久しく我に事へて誠實の君子あり安  
んぞ彼が妻子を獄に下すに忍びんや張昭が曰く明に此  
計事を告知せ仮に捕へて獄に下し玉へ然る時ハ何の碍か  
あらん孫權之に従ひ諸葛瑾を召て其事を語り仮に其妻子  
一族を收め捕ければ諸葛瑾速かに成都に到る玄徳之を聞  
て孔明に問て曰く先生の兄此に來るハ如何ある爲あらん  
孔明が曰く之荆州を取の計事あり玄徳の曰く然る時ハ如  
何答へん孔明耳を附て簡様く低語其後自ら出て之を

○關羽單刀にして呉の會に赴く  
此時呉の孫權ハ玄徳已に蜀の國を取て劉璋を公安へ移し  
たりと聞て諸大將を集めて申けるハ昔初玄徳我に荆州を  
借て蜀の國を取ハ必らず返さんと約せり今巴蜀の四十一  
州を取て猶未だ荆州を返さ早く使を遣して此事を促し  
若返させんハ大軍を起して攻取ん張昭が曰く我國初めて

三六十一

迎へ私の宅に到らず直ちに客屋に入て参拜了りければ諸葛瑾を放つて大いに哭く孔明驚いて曰く兄何を哭き玉ふぞ早く其故を告玉へ諸葛瑾が曰く我妻一族を誅せらる孔明が曰く荆州を返さるるに依て此の如くあるか某が故を以て兄の妻子一族を失はん事豈坐ら見るに忍んや御心を安んじ玉へ某君に申して荆州を返し與へん諸葛瑾密かに喜び入て玄德に見へて孫權が書簡を献りければ玄德披き見て大いに怒り我本荆州を呉に返さんと思ふ所に汝潜かに孫夫人を欺いて呼回す何とて斯の如くに情薄き是我面目を失ふ處あり一度此耻を雪んと思ふ恨骨髄に入り昔荆州に在し時にも汝を以て肩とせ今蜀の四十一州を並せて精兵數十萬糧卅二十年の貯へあり我兵を起して呉を踏破らんと思ふ事已に久し汝争でか荆州を取事を得んと聲を屬して宣ひければ孔明哀み哭き地に拜して申けるの呉主孫權某が兄の妻子一族を獄に下し若荆州を返さずんば盡く誅せんとす兄若誅せら

れば某如何して生殘らん君願くば兄弟の情を憐み玉へ玄德尙怒りて再三從ひ玉らず良久して宣ひけるの軍師の思ひ難止がたければ荆州の内長沙零陵桂陽の三郡を呉に返さん孔明が曰く然らば書簡を關羽に送り此趣きを告て三郡を呉に返さしめ玉へ玄德の曰く諸葛瑾自ら荆州に行て何卒して三郡を求め玉へ我弟の關羽の性急にして烈火の如し我猶之を懼る宜しく子細にし玉へとて乃ち書簡を渡し玉へ諸葛瑾相別れて直ちに荆州に趣く關羽迎へて中堂に請じ禮了りて座に着ければ諸葛瑾即ち玄德の書簡を渡し曰く將軍速に三郡を返し玉へ關羽俄に色を變じて大いに怒りて申けるの我兄と桃園に義を結んで誓つて生死を同ふす是元漢室を再び興さんが爲あり兄已に荆州を我に與へて今又三郡を分て呉に返せとは如何ある道理ぞ還州郡の皆大漢の地あり豈一寸の土をも妄りに人に與へんや諸葛瑾が曰く主人孫權某が妻子一族を獄に下して荆州を返さるる時ハ悉く誅せんとす將軍

願くば之を憐み玉へ關羽が曰く御邊が妻子一族を誅せんといふ此皆詐りの計事あり如何ぞ吾を欺き得ん諸葛瑾が曰く將軍若返し玉へざる時は是我面目を失ふ所あり關羽劍を抜て申けるの再び詞を出す事かこれ劍面目を失はじ關平急に諫めて申けるの父怒りを休玉へ彼ハ孔明軍師の兄あり關羽牙を咬で申ける我孔明を思ひせん再び汝を生て回さし者を諸葛瑾羞怕れて爲べき様無く慌て又舟にのり再び蜀に來りて孔明を尋ねれば此時孔明ハ諸郡の巡檢に出て在合是に依て玄德に見へ哀み哭いて關羽が殺さんとせし事を語りければ玄德の曰く關羽ハ性急に於て仮初にも説難し御邊且く回り玉へ我漢中を攻取て張魯を平け關羽を召て之を守らせ其時荆州を呉に回さん諸葛瑾詮方あく玄德の書簡を求めて呉に回り關羽が荆州を回さる由を告ければ孫權大いに怒つて曰く玄德の回さんと雖も關羽が從はざるの皆之孔明が計事にてはなきか諸葛瑾が曰く然らず孔明ハ哭いて玄德に告先三郡を回さ

んと申したり孫權諸の大將を召て申けるの今玄德我荆州を借て年久しく返さる已に三郡を分て先回さんと約をかせり試みに官人共を長沙零陵桂陽の三郡に遣して其体を窺ひ見よとて諸葛瑾が一旗を督獄より出しけり去程に三郡を受取んとて荆州に赴きたる官人共悉く退回され遅く逃る者ハ多く關羽に殺されたりと告ければ孫權のよ怒つて急に羈虜を呼濟汝當初使を命して玄德若蜀を取らば必らず荆州を回さんといへり今已に蜀を取て之を回さるの如何ある道理ぞと責ければ孫權が曰く今一の計事あり兵者を陸口に屯し酒宴を設けて關羽を招ぎ若來らば言を和けて荆州を求め猶從はずんば帷幕の陰に精兵を伏置忽ちに之を殺さん若招げざる來らずんば大軍を起して勝負を決し是非かく荆州を奪ひ取ん諸人の評議已に定れり君の命を受けて行はん孫權が曰く之正に存意に合へり速に之を行へ時に一人進み出無用々々關羽ハ乃ち世の虎將あり等閑の及ぶべきに有す恐くば此計事諧はず

して反つて其害を被らんといふ者あり諸人之を見れば關  
 澤あり孫權怒つて申けるハ然る時何年にハ荆州を得ト  
 早々に之を行へ魯肅命を受けて兵者を陸口に屯し呂蒙甘寧  
 を召て別事を定め會宴を陸口の塞外臨江亭の上りに設け  
 會簡を調へて使を荆州に遣しける使ハ江を渡りて江口に  
 着ければ關平其故を問て共に荆州に入引て關羽が前に出  
 し書簡を呈しければ關羽披き見る其書に曰ク  
 辱友魯肅頓首書を漢の將軍侯の麾下に致す別れ奉り  
 て久し瞻仰すれども由おし今暫く兵を陸口に屯し車騎  
 を臨江亭に迎へて一會し以て渴仰の懷を訴へんと欲す  
 然るも各々其主事と雖も即ち異外の心おし専ら來  
 臨を望む幸ひに阻らる、事おかれ感々  
 關羽見了りて其使を呼ひ魯肅我を招いで會宴せんと欲す  
 明日必お行ん汝先回れといひければ使拜謝して呉に回る  
 關肅諫めて曰ク魯肅が會宴ハ必ず惡心あらん父何故に輕  
 々しく行んと宜んぞ關羽笑つて曰ク我之を知らじき此

ハ諸葛瑾呉に回りにて吾三郡を回さぬを告たるゆゑ孫權又  
 魯肅を責む此故に魯肅計りて兵を陸口に移し吾を招いで  
 荆州を求めん爲あり吾若行ずんば足懸するに似たり明日  
 小船に乗て只十餘人を從へ單刀にて會に赴かん魯肅  
 如何ぞ我に近付ことを得ん關平又諫めて曰ク父千金の重  
 き御身を輕くしく虎狼の穴に陷玉ふ魯肅曰ク我千鎗  
 萬刀矢石交も攻るの際に在て匹馬縱横人おし所を行が  
 如し豈呉の國の風を怕れんや馬良之を問て諫めて曰ク魯  
 肅ハ長者の風ありと雖も心の中事を急にす恐くハ狼心お  
 き事能ハし將軍輕くしく行玉ふべからん關羽曰ク昔  
 春秋の時に趙の國に藺相如と云し人の鶏を縛るの力  
 もおくして涪池の會に秦の國の君臣を傲視して物おきが  
 如くにせり況んや且て万人の敵を學ぶ已に行んといふ  
 て今又行せんば是信に背くあり馬良曰ク假令將軍行玉  
 ふども宜しく用心し玉ふべし關羽曰ク我只關平に船手  
 の精兵五百人を付快船十艘を揃へて此方の岸の邊に待せ



かき我只一人江を渡りて會に赴かん若旗を以て招くを見  
 ば早く船を飛して馳來れ關平父の命に從ひ兵を揃へて北  
 の岸に出ければ關羽八十二斤の青龍刀を周倉に持せ小船  
 に乗て江を渡る去程に使回りにて關羽が明日來る由を告げ  
 れば魯肅密に呂蒙を呼び計事を議す呂蒙曰ク關羽必定  
 大勢を引て來るべし若兵を率ひ來らば某甘寧と各々一  
 軍を引て岸の側らに伏鉄砲を鳴すを相圖とし一度に出て  
 悉く討止ん若又兵者を率ひ來らすれば庭の後に屈強の  
 武者五十人を伏せき席上にて之を殺せしめて計事已に  
 定り次の日人を出して窺ひしむるに辰の刻に及んで向ふ  
 より一艘の船來り紅ひの旗に關の字を大文字に書たるお  
 りと申す其船已に岸に着ければ關羽綠の袍を披て船よ  
 り上り周倉とて面ハ蛟の如く臂に千斤を揚る大力彼青龍  
 の大鎗刀を執て相從ひ劣らぬ兵者八九人皆腰に刀を横た  
 へ相續いて踊り上りしかば魯肅出迎へて腰に驚き前に向  
 つて禮を施し引て臨江亭の中に入れれば關羽相從ふ者を



遠く外に住め置周倉一人を具して内に入る魯肅拜伏して自ら盃を捧げ仰いで關羽を祝する事能はず畏れ入て居たりしが酒半酣に至りて申けるハ某一言あり願くハ君に語らん幸ひに聽て察し玉へ昔劉皇叔偏に某を以て往來の使たらしめ主人孫權に荆州を借玉ひ今に至るまで回し玉はず此約を背いて信を失ふにわらずや關羽が曰く之ハ國家の大事あり酒宴の席にて論せべからず魯肅が曰く我國本荆州を劉皇叔に借たるハ當時曹操に攻破られ遠路を逃て疲れ玉ひしを憐れ飯に力を合せて其難を救ひしものあり今已に蜀の四十一州を取て豫荆州を回し玉はず位かに三郡を分て回さんと宣ふと君之を止めて皇叔の命に背き信義を天下に失はしめ玉ふ君ハ幼きより儒書を讀玉ひ五常の道を正して仁義禮智皆全しと申せきも唯信を欠玉ふ許りあり關羽が曰く鳥林の戦ひに我劉皇叔自ら矢石を犯して敵を破り身を捨て功を成玉へり斯る功勞を建て豈徒らに荆州を拜て取ざるべきか相違必定

來りて之を取回し玉はんや魯肅が曰く然らば君初め劉皇叔と共に當陽の長坂に破られ手下の勢悉く討れて計事窮り勢ひ盡如何とも爲べき様なくして遠く竄れて身を保たんとすれども及ばせ我主人之を憐れ皇叔の一身を容るに處なきを見て國の費を惜まらず民の勞を顧みず曹操を赤壁に破りて其思ひを濟ひ玉へり是豈容易の事あらんや然るに劉皇叔私に情を飾りて今已に蜀の州郡を取玉ひかから猶荆州を回し玉はず枉て併せ領せんとし玉ふ是凡夫だも行ふに忍びざる所あり況んや人物の主たるをや古より貪つて義に背くハ必らず禍ひの陪ありと云り關羽が曰く君よく之を裁斷し玉へ關羽が曰く之皆我兄劉皇叔の事あり某が預り知處にわらず魯肅が曰く某承ハる昔桃園に義を結んで共に生死の交りを誓ひ玉ふと然る時ハ劉皇叔ハ即ち足下あり何故ハ知處に在せと宣へる關羽答ふべき詞なく默然として居たりけれハ傍らに在ける周倉聲を屬して曰く天上地下惟徳ある者之を保つ豈御

邊が主孫權のみ荆州を保つの理わらんや時に關羽俄に色を變じて周倉が持たる青龍刀を提げて亭中にツト立て申けるハ之ハ國家の大事あり汝何を敢て舌を搖せとて屹と目合それハ周倉其意を曉りて岸の邊に走り出紅の旗を把て遙かに招けハ江を隔て叩へる關羽が勢五百餘人スハヤ和鬪をせるハ急げとて十艘の快船矢の如く東の岸に馳來る關羽ハ右の手に青龍刀を提げ左の手に魯肅を掴み伴りて酔たる体をあし御邊今我を請して酒宴し玉ふ是非を論ずるに及ばず大いに酔て答ふる事能はず恐くハ故舊の情を傷ふべし他日又御邊を荆州に請して一會をささん我且別れて回らんとす船まで送り玉へと云て小兒を提たるが如くにして岸の邊まで出けれハ魯肅怖れ慄き魂も天にさる心地して江邊に提られ出たり兼てより呂蒙甘寧ハ兵を伏て關羽を漏さじと待ける所に關羽大いある刀を提げ魯肅を掴んで出たるを見て若討て出ハ魯肅が殺されん事を怕れ兵を制して更に出ず關羽ハ船の上に到りて初

めて魯肅を放し共に別れをあしけれハ魯肅茫然として酒に酔たるが如く關羽が船已に順風に乗じて飛が如くに去しかハ呂蒙甘寧等魯肅と共に本陣に回り此計事また成す如何すべきと議しけるに呂蒙が曰く早く君に申して大軍を起し勝負を決して荆州を取ん魯肅之に従ひ孫權に右の趣きを報じけれハ孫權之を聞て大いに怒り傾國の軍兵を出して荆州を攻んと議する所に忽ち早馬急を告て曹操又三十萬の勢を率して吳の國へ推寄ると報じけれハ孫權膽を冷して申けるハ斯てハ荆州を攻る事叶ふまじ急ぎ合湘濡須の邊に出て曹操を防げとて大軍を揃へて進發す

○曹操伏皇后を擊殺す

建安十九年の冬曹操大軍を起して吳を滅さんとて已に手分を定る所に參軍傅幹守ハ嚴材といふ者上書して諫めて曰く

幹伏て聞天下を治るの大具二あり文と武とあり武を用る時ハ則ち威を先にし文を用る時ハ則ち徳を先にす威

徳以て相濟して而て後に王道備へる往者天下大いに亂れ上下序を失ふ明公武を用て之を擯ひ其九を平ぐ今王命を承ざる者ハ吳と蜀とあり吳に長江の險あり蜀に崇山の固あり威を以て勝難く徳を以て懷け易し愚以爲く且甲を接へ兵を寢め軍を息士を養ふ士を分て封を定む功を論じて賞を行ふ此の若くある時ハ則ち内外の心固うして功ある者勦み而して天下制を知ん然して後漸く學校を興し以て其善性を導いて其節義を長じ公の神武威四海に震ふ若文を修め以て之を濟ふ時ハ則ち普天の下服せざる事なし今數十萬の衆を擧て長江の濱に船若賊固を頼んで深く藏れ時ハ則ち士馬其能を逞しうする事能ハ奇變其權を用る所なし則ち天威屈する事有て而して敵心未だ服する事能ハ惟明公虞舜羽を舞その義を思ひ威を全くし徳を養ひ道を以て勝ことを制する時ハ則ち國家の幸なり願くハ焉を釣察せよ

曹操見了りて遂に吳の國に向ふ事を罷多く學校を造り設けて學者に道を教へ政事を治めて民を懷けしかハ王祭杜襲衛凱和洽などいふ四人の侍中共に相議し曹操を尊んで魏王の位に即しめんとす時に中書令荀攸申けるハ此事決して然るべからざ今丞相官魏公に至り榮九錫を加へ爵を諸侯に進めて已に金璽を受玉ひぬれば人臣の望み身に餘れり今又王位に即玉ハんハ理に於て必ず此事を止させ玉へと諫めければ曹操大いに怒り此人も又荀彧に效ハんと欲するかと云しかば荀攸其意を知て十月病に臥し數日の内に亡びけり時に年五十八歳曹操此由を聞て後悔し厚く葬りの儀を執行ひ遂に魏王の事を聞きける或日曹操劔を帯て内裏に入れば帝伏皇后と共に坐して御座ありしが曹操が來れるを見て急に起て迎へさせ玉ハ大いに怖れ戰き玉ハ曹操申けるハ玄徳と孫權と共に一方に覇として朝廷を尊ばせ之を如何して服せしめん帝の宣ハく此皆魏公の裁斷にあり曹操怒つて曰く陛下左様の言を出し玉ハ文武の臣之を聽むがら偏に某が君を欺くと沙汰ハ帝

の宣ハく君若朕を輔る事厚き時ハ安んぞ其思を忘るべき曹操座を立て作り眼をなし帝を威してツト出たり時に諫議郎趙儼といふ者帝に見へて近頃曹操自ら魏王とならんとす久しからずして必らず天下を奪ふべしと奏しければ帝伏皇后と哭き悲み玉ハハ此由を曹操に告る者あり曹操怒つて武士を引具し禁裏に打入趙儼を生捕て市に斬る帝之を聞て驚き哭かせ玉ハ伏皇后の曰く我父伏完ハ常に曹操を殺さんとする心あり我父を以て父に此事を訴へ早く計事を成しめん帝の宣ハく昔董承事をあすこゝと密なきを以て反つて大いある禍ひに遭り恐くハ又事漏て朕も后も愛目を見ん伏皇后の曰く然りと雖も朝夕針の席に坐するが如し片時も心を安んぜざる事なし命存らへて何かハせん早く死んにハ如じ我常に心を付て内官を見るに只一人忠義を正して曹操を殺さんとする者あり此人を頼んで密かに父の方へ文を送らん帝の宣ハく如何なる人を伏皇后の曰く穆順にあらせんハ叶ふまじとて即時に召

密傍らの人を退けて帝も后も共に哀み哭き曹操自ら魏王と成て天下を奪ハんとする心あり宮中の人悉く彼が耳目なり朕夫婦すべき様なく誰に語るべき人もなし汝密に此文を伏完に送り共に計事を運して此難を救へと宣ひければ穆順涙を流して曰く臣久しく陛下の大恩を蒙り命を捨るも何ぞ惜まん願くハ伏完と共に計事をあさん帝限りなく喜び后の文を渡し玉ハ穆順之を驚の中に藏し密に内裏を出て直ちに伏完が宅に到り后の文を出しければ伏完披き見るに扮れなき我女の文あり乃ち穆順と議して申けるハ我朝廷ハ聚官を見るに敢て曹操に近付べき者なし吳の孫權蜀の玄徳を語ひ兵を起して都を攻させ玉ハ曹操自ら出て防ぐべし其隙に朝廷忠義の舊臣を語ひ一同に事を起さん穆順が曰く然らハ返簡を封じて此事を帝と后とに告げ御心を安んじ玉ハ伏完實もとて返簡を封じて穆順に渡しければ穆順又よく穆順の中に藏し別れて内裏へ回りけるに曹操向に穆順が外へ出たるよしを

間自ら宮門に立て其回るを待程順走りて前に来りければ  
 曹操問て曰く汝何くへか行たる程順答へて曰く皇后俄  
 に腹の疼あり某に命じて醫者を尋ねしむ曹操が曰く醫  
 者何くにかある程順が曰く事急にして未だ見へを曹操  
 怒つて武士に命じて逼く捜させけるに更に一物もなかり  
 しから其儘にて放しけり程順虎の口を逃れたる心地して  
 歩を回らんとする時忽ち風吹て頭を被たる帽子を落す曹  
 操之に心付て呼回して自ら帽子を見るに怪き事もなかり  
 しかば乃ち返し興へけるを程順兩の手に受取頭に戴き  
 て行んとしければ曹操推止め壁の中に必ら老子細あら  
 んとして自ら捜しけるに果して伏完が后に答ふる文あり披  
 きて之を見るに玄徳孫權を語ひ早く曹操を殺さんと書た  
 りければ曹操大いに怒り程順を縛り拷問するに更に落さ  
 りしかば其夜三十の精兵を率して伏完が宅を取囲み内よ  
 入て逼く捜しけるに伏皇后の文を取らせり曹操いよく  
 怒り伏完が三族を捕へて獄に下し夜明て御林將軍郝懿に

節を持って内裏に入先皇后の璽綬を奪ふて平人とささしひ  
 是時帝の外殿に出て御座ありけるが郝懿鎧たる兵三百人  
 を引て来りければ帝驚いて何事かあると問玉ふ郝懿答へ  
 て曰く魏公の命を受け皇后の璽綬を收め以帝事の泄たる  
 を知て臆を落し魂と失つて怖れ慄き玉ふ郝懿直ちに後  
 宮に入れば伏皇后寐所より出玉ひ事の泄たるを聞て急  
 に椒房の門内に走り壁の間に藏れ玉へり少刻ありて尙書  
 令華歆又五百の精兵を率して後宮に入伏皇后へ何く居  
 玉ふと問せり宮女皆相推りて房中に藏れ玉へりと答ふ華  
 歆兵を下知して朱戸を打開き逼く尋ねれども更に見へき  
 餘りよ求めの鎌刀を持って壁を切開きければ伏皇后ワツト喚  
 いて走り出玉ふを華歆自ら後の 壁を掴んで拖出せし皇后  
 痛く哭き慄く我命を扶けよと叫び玉へり華歆大いに叱  
 り汝自ら魏公に見へて哭けとて武士ども引立て髪を亂  
 し跣足にして外殿に出ければ帝ハ之を見玉ひ殿上より走  
 りたり后を抱いて哭き玉ふ華歆聲を怒らし魏公の命なり

速かに行と下知すれば皇后聲を放つて哭き復活る事能  
 ざるかどて地に倒れ玉ふ帝も御袖を推わて朕が命も刺り  
 がたしと云て御涙に咽び玉へり武士ども前後を打圍み后  
 を追立て出にけり帝之を望み見て臂を打て哀み哭き郝懿  
 が傍らに在しに向つて如何郝公天下に寧ろ簡様の事有ん  
 やと宣ひ地の上に昏絶し玉ひければ郝懿扶けて宮中に入  
 り奉る華歆后を撃つて曹操に見へければ曹操大いに怒り吾  
 賊の心を以て天下を治む汝等反つて我を害せんと謀るか  
 我汝を殺さるに汝必ず我を殺さんとするやと云て武  
 士も命じて亂棒を打殺させ又宮中よ入て伏皇后の生玉へ  
 る二人の皇子を酖毒にて殺し奉り伏完程順が一門二  
 百餘人を捕へて悉く市に斬ければ朝野の人皆驚き怖れ  
 さるのちし時建安十九年十一月なり帝ハ伏後の御歎き  
 曹操又如何なる荒き沙汰をか致さんとて宸襟を安んじ  
 玉ひす連日供御をも聞し食れざる所も曹操來り見へて申  
 けるハ陛下少も憂ひ玉ふな臣等がか情なき行ひをなさ



曹操伏皇后を殺す

ん臣が女已に陛下の貴人たり大賢大孝にして宜しく皇后に備ふべしと勤めければ帝已事を得ずして之に従へせ玉ひ建安二十年正月朔日に曹操が女曹貴人を冊立て皇后としければ群臣敢て言を出す者もなかりけり

○曹操漢中の張魯を破る

曹操手下の大將を集め吳蜀と滅すの計事を謀しければ賈詡申けるハ宜しく夏侯惇曹仁を召て此事を謀り玉へ曹操之に従ひ急に羽檄を飛して二人を召す時に夏侯惇ハ未だ來らき曹仁先來りければ直ちに府中へ入て曹操に見へんとするに折節曹操酒に酔て睡り居たり許褚劍を執て堂の門に立曹仁を推止めて内に入しめざりければ曹仁怒つて曰く我ハ乃ち征南の重臣にして曹氏の一門に連る身なり汝如何なる者なれば此の如くに無禮ある許褚答へて曰く將軍ハ誠に曹氏の御一族にして甚だ親さとの申あがら已に外に出て敵を征するの官なり某ハ疎かにして身賤き士卒なれども内侍の仰を承へりて君の傍らに離る事お

し今君酒に酔て堂上に臥玉ふ此故に人を入すと云ければ曹操之を聞て急に走り出虎侯がいふ處甚だ明かなり誠に忠烈の大將あり曹仁怪む事おかれとぞ申ける數日わりて夏侯惇來りければ共に計事を商議するに夏侯惇が曰く吳蜀未だ急にハ攻べからず先漢中を攻て張魯を亡し勝に乘て蜀を伐べ一鼓して破るべし曹操喜び之正に我心に合へりとて西征の大軍を三手に分夏侯淵張郃と先陣とし曹仁夏侯惇を後陣として兵糧を司せらしめ曹操自ら諸將と中軍に備へ漢中をさして推濟る此由先達て漢中に聞へければ張魯大い驚き諸將と計事を謀るに弟張衛進み出て申けるハ漢中第一の要害ハ陽平關に如べかとす左右山に依林に傍て十餘ヶ所ハ柵を下し險阻を守りて拒ぐべし一兄ハ漢中に陣を取て兵糧を送り玉へ張魯之に従ひ張衛を大將として楊昂楊任二人を副將とし陽平關を出て防がしむ去程に曹操が先陣の勢已に陽平關に近付けるが敵大勢にて要害に支へたりと告げれば關を離る事十五里に

て陣を取其勢皆長途に疲れ悉く前後も知ず寐入たる所又夜更て陣の後より火を付楊昂楊任二手に分て推密たり夏侯淵張郃兼耳に聞て打驚き馬よ物の具よも躡ぐ間に奇手の大勢悉く斬て入散々を燒たりか魏の勢若干伐れて後陣此勢も逃加へる曹操先手の破れたるを見て大いに怒り夏侯淵張郃を呼出し汝二人久しく兵を用ひて兵若し遠行疲困可防切楽といふ事を知らずや何故に油斷して此の如く討れたるぞとて軍法を正さんと罵けるを諸將強て諫めしゆ急漸々に免しけり次の日曹操自ら兵を引て先手に進み先地望を望見るに山の勢ひ險阻にして樹木茂く雜りければ敵の伏勢あらん事を怖れて再び退き回リ許褚徐晃二人に向つて我此處の此の如くに難所あるを兼てより知たらば必らず來るまときを云ければ許褚が曰く已に此處に行迫れり君少しも憚り玉ふ赤次の日曹操自ら馬に乗て許褚と徐晃と只二人を從へ潛に來つて山の坡に上り張衛が陣を望み窺ひ遙かに鞭を揚て敵の陣此

の如くに堅固なれば急にハ破り難からんと云ける處に忽然として後に賊の聲を擧矢を放つ事申の如し曹操驚いて急に顧みれば楊昂楊任二手の勢殺し來る許褚大音わけ我ハ敵を防ぐべし徐晃ハ君を守護して出玉へと呼はる所に敵の大勢四方より群り燒りけるを許褚刀を舞して勇を振ひ戦ひければ楊昂楊任が大勢其怪力も怖れて一人も近付こと能はず馬を回して引退く徐晃此間に曹操を扶けて許褚と只三騎にて大勢の中を斬破りける時一手の勢馳來る曹操之を見れば敵にハあらで夏侯淵張郃が救ひの勢あり敵の追蒐るを取て回して散々に戦ひ曹操と守護して本陣に回りければ曹操萬死を逃れたる心地して四人の大將を重く恩賞し互ひに相拒んで五十餘日に及び暮々しき軍もあかりしかば曹操下知を傳へて陣屋を收め都に回らんとす賈詡が曰く敵の勢ハ猶未だ強弱を見ず君何故に退き玉ふ曹操が曰く我思ふハ敵の兵日夜要害を守つて急よハ中々破り難し吾今詐りて引退くと沙汰せば敵必らず心忌

りて油断すべし其時反つて騎馬の勢を輕々とするり潜り  
敵の後を襲ひ敵必ず破るべし賈詡が曰く丞相の神機維  
か能測り知ん曹操乃ち夏侯淵張郃各々三千餘騎を付て  
二手に備へ小路を廻りて陽平關の後を攻め先大軍を收  
めて引退く体と成れば楊昂之を聞つけ楊任に申けるハ  
今曹操退いて都に回る勢ひに乗て之を討べし楊任が曰く  
否々曹操ハ詭りの計事極めて多し未だ眞實を知れず  
追べからず楊昂が曰く此時を失ふべからず御邊ハ此  
住れ我自ら追蒐ん楊任再三諫めければ楊昂遂に從はず  
悉く五寨の軍馬を起して勢ひに乗て追蒐し俄に夕霧  
立掩ふて面を對すとも見分難かりければ半途に出陣を  
取霖の晴るを相待けり擲手に廻りたる夏侯淵が一軍ハ潜  
に山を超て進みける霧の内ハ人馬の音一けれ敵の伏  
勢よてやあらんとて急兵を退けたる方角も迷ひて誤  
りて楊昂が陣の前に出たり陣中にハ僅なる士卒を残して  
守らせけるが大勢の來るを聞て御方の兵回りぬといふ者

ありければ楊昂が回りたるハとて急に門を開きけり夏侯  
淵が三千餘騎悉く込入けるに敵更に出合ざりしかば四  
方に散て一度に火をかけ賊の聲を揚たりけるに五寨の軍  
勢大いに亂れて四角八方へ逃走し霧晴て後楊任兵を引  
馳來り先火を打消んとする所ハ夏侯淵が勢前より蒐り張  
郃が勢背より蒐りしかば楊任戦ふべき力なく漢軍包州を  
指て逃走し楊昂ハ曹操を退んとて已に半途まで出けるが  
後に火の付たるを見て急に取て回ける時夏侯淵張郃已  
に陽平關を攻取曹操大軍を驅て後より追かくる楊昂後を  
包まれて逃べき路なく一方を打破つて落んとすれば張郃  
鎗を燃つて突て蒐り楊昂を馬より下に突落し首を取て指  
上たり大將張郃ハ楊昂が討れたるを見て夜半に南鄭を  
望んで逃去ければ張郃大いに怒り楊任を斬て弄んとしけ  
るに楊任申けるハ某再三楊昂を諫めしかども彼從はず  
して此敗を取れり再び一軍を乞て戦ひを決し如打負なば  
必らず軍法を蒙らん張郃之は從ひ又二萬餘騎を分與へて

南鄭關ハ陣を取しむ此時夏侯淵ハ勝軍を收めて曹操を見  
へ早く兵を進め玉へと申ければ曹操が曰く且一軍を以て  
行先を窺はしめ大軍跡より進むべしとて夏侯淵ハ五千餘  
騎を分與へ南鄭の路を窺ハ一むるに端なく楊任が勢を出  
合互ひ陣を開き張て楊任が陣より大將昌奇といふ者馬  
を出して夏侯淵と鋒先を交へけるが戦ひ三合にして馬よ  
り下に切て落さる楊任之を見て自ら鎗を燃つて突て蒐り  
戦ひ三十餘合にして勝負を分たす夏侯淵詐り負て走りけ  
れば楊任急に追蒐る所を夏侯淵引返して楊任を一刀に砍  
て落す敗軍大將を討れて四角八方へ逃たりければ曹操大  
軍を驅て大いに進み南鄭關ハ陣を取張郃此由を聞て恐れ  
驚き文武の大將を集めて計事を問ければ大將閻圃が曰く  
某一人を薦めて敵を防がしめん張郃が曰く何人を閻圃  
が曰く南安桓道の人に龐徳字ハ令明といふ者なり初め馬  
超に從つて此處へ來りしが馬超が蜀へ向ふ時ハ病に臥て  
此に留れり久しく君の恩養を被る何ぞ此人を用ひ玉はざ

る張郃實もと喜び即時ハ龐徳を召て自ら持成一萬餘騎を  
分與へければ龐徳十里餘り出て陣をさる曹操兼て龐徳が  
名を知り涪橋の戦ひに其手双の程を看たりしかば手下の  
大將に申けるハ龐徳ハ本西涼の勇將にして原馬超ハ從ひ  
今張郃ハ依と雖も其心更も喜びす君此者を得て御方ハ用  
ひんとす汝等皆續く戦つて彼の氣力を疲らし何とぞ欺い  
て擒ませよと云ければ張郃一番馬を出し二三合戦つて  
引退く二番に夏侯淵馬を出し暫く戦つて走りければ三番  
に徐晃入替りて五六合戦ひ詐りて引退く四番に許褚馬を  
出し五十餘合戦ふて退さけるに龐徳少しも怖る、氣色な  
し諸大將皆曹操を見へて龐徳が武藝尋常ならずと稱譽し  
ければ曹操心中ハ喜び諸將と計事を議するハ賈詡が曰  
く張郃が手下に楊松と云る謀士あり此人慾心飽ことを知  
ずして極めて賄ひを貪る今密かに金帛を送りて彼が心を  
結び張郃に龐徳を疎せしめん曹操が曰く如何して人を南  
鄭の城ハ入ん賈詡が曰く明日録先を交へて詐り負て引退

其陣屋を敵に取せて夜入大軍を以て四方より襲ハ、龐  
德必し退いて城に入ん其時辨舌の人を擇び歩軍に扮れ  
て城中に入密に揚松を尋ねて此計事を行ハ、ゆん曹操大  
いよ喜び一人の士卒に能々此事を云合め黄金の心當を屬  
に若て表ハ漢中の兵も出立半途より出て相待せ次の日夏侯  
淵張郃二手の勢を遠く出て埋伏せしめ徐晃一軍を付て  
敵の陣に攻蒐らしむ龐德兵を驅て進まければ徐晃戰ひ  
二三合にして詐りて逃走る龐德勢ひに乘て追かけ遂に曹  
操が先手の陣屋を奪取此陣中ハ兵糧多く在けるゆゑ勝  
軍の糧を張郃に報じければ張郃大いに喜びけり其夜二更  
の頃に至りて俄に三方より火を掛て徐晃許褚中央より推  
よせ左ハ張郃右ハ夏侯淵賊の聲天地を動しければ龐德馬  
に乗テ陣屋を出ける時早敵の大勢亂れ入る之に依て一支  
へも支へず南鄭を指て逃走るも後より曹操が大軍追かけ  
一かば龐德が一萬餘騎悉く城中に入殿しく守りて防ぎ  
戰ふ此際さし曹操が細作城中に扮れ入揚松が宅を尋ねて

密に黄金の心當を贈り曹丞相入一く足下の盛徳を聞て  
某を以て好を結ばしむ乃ち書簡ありとて出しければ揚  
松披き見て乃ち使に問て曰く今丞相ハ何事をか願ひ玉へ  
る使答へて曰く若龐德を遠ざけ玉ハ丞相喜び玉ハん  
揚松が曰く此事何より易し汝先回れとて直ち張郃を見  
へ龐德密かに曹操と内應して今日の軍は負たりと説しけ  
れば張郃大いに怒り即時龐德を呼出して散々に罵り首  
を刎んと云けるを聞聞諷めて之を止む張郃怒り止す汝  
明日の戦ひハ勝せんハ必ず首を斬んと云ければ龐德恨を  
含んで退出す次の日曹操が大勢攻蒐りければ龐德兵を引  
て城を出時許褚自ら馬を出し暫く戦ふて逃去りければ  
龐德急を追かくる曹操馬に乗て山の上より立大音あげて龐  
德何ぞ早く降らざると呼はりければ龐德屹と看て曹操を  
生取んと思ひ千餘騎を引て驛地暗に上りけるが忽然と一  
て賊の聲響き人馬共に陷穴の中より落入上より下へと落く處  
を四方より熊手に引かけたに龐德を生取て曹操が前より推

出す曹操馬より飛下軍士を追拂ひて自ら其繩を解平し我  
事へよと云ければ龐德其志を感じて張郃が情あかり  
し事を恨み了り再拜して降人となる曹操限りなく喜び扶  
けて馬よのせ態と城の邊を打通り轡を双べて本陣より回  
りければ漢中の兵糧の上より之を望み張郃に報じて只今龐  
德と曹操と馬を双べて通りたりと告げれば張郃大いに怒  
りさればこそ揚松が言入違はずとて之より揚松をいよ  
く重んず次の日曹操が大軍三方より推密雲の梯を造  
り攀て鉄砲火矢を雨の如くに放ちければ張郃之を防ぎ兼  
て弟張衛と計事を議す張衛が曰く如し火を付て城廓  
倉庫を燒盡し巴中より走つて要害を守るべし揚松が曰く只  
門を開いて速かに降り玉へ張郃猶豫して心未だ決せざり  
ければ張衛が曰く事已に急なり早く火を掛て巴中に去ん  
張郃が曰く我本命を國家に歸せんとして意未だ達する事  
と得ず今鋒先を避て此を去と雖も何ぞ惡意を存すべし城  
郭倉庫ハ本之國家の物にして私に濫すべき理あしとて

財寶の倉庫よことごとく鎖を閉て能々封じ其夜の二更  
よ一家の老少を盡く引具し南の門を出て走りけり曹操  
大軍を引て城中に入ければ張郃が倉庫を封じたる事を告  
る者あり曹操之を聞て甚だ憐み兵を制して追しめず人を  
巴中より遣して若降参せば重く用ひんといふ張郃ハ降ら  
んと欲すれども弟の張衛肯て從はず揚松密かに曹操に書  
簡を送りて速く攻蒐り玉へと告しかば曹操大軍を引て  
自ら巴中より推密雲の張衛之を聞て城を出て戦ひけるが許褚  
と出合一刀を斬れけり敗軍走り回りに此由を告げれば張  
郃固く守りて防がんといふ揚松が曰く今若戦せんば必ら  
ず大なる禍ひよ遭ん某よく此城を守らん君自ら出て  
快よく一勝負決し玉へ聞聞申けるハ君必らず城を出玉ふ  
な恐くば不慮の憂ひあらん張郃が曰く揚松が意見我心よ  
合へりとて了に聞聞が諫めを用ひず自ら城を出て戦ん  
とする時手下の勢後より亂る此に因て急よ退かんとすれ  
ば曹操が大軍透問もあく追蒐る張郃城下に到り門を開け

と叫りけりれども揚松肯て開かざりしかば力あく馬を回  
さんとする曹操大音あけ早く降参せよと叫り張魯すべ  
さ様なく馬より下て地に拜伏しければ曹操大いに喜び倉  
庫を封トたる志を感じ慙慙に持成鎮南將軍に封トて關  
國等五人を列侯とし漢中ことごとく定りければ州郡に地  
頭を居て士卒を賞し惟揚松の君を賣て富貴を貪る曲者な  
り諸人の戒めよせんとして市に出して殺しければ人民皆快  
よしとぞ申しあひける

○張遼大いに道通津に戦ふ

曹操已に漢中を兵取ければ主簿司馬懿字ハ仲達進み出て  
曰く玄德詐りの計事を以て蜀の劉璋を虜にし其國を奪取  
たるゆゑ人民未だ心を安んせよ今丞相已に漢中を取玉ひ  
ぬれば蜀中震動して人民悉く怖れ戦へん此時に乗て速  
に攻取玉ひ勢ひ必き瓦の如くに碎けん聖人も不レ可  
レ違し時又不レ可レ失し時と云り早く兵を進め玉へ曹操嘆  
じて申けるハ人皆足事を知す已に隨を得て復讐を望まん

州の三郡を具に返し利害を説て孫權に合淝の城を攻させ  
なバ曹操必ら南に回らん玄德大いに喜んで曰く誰を  
以てか此使とせん一人進み出て曰く某願くハ行ん諸人  
之を看れば伊籍なり玄德然るべしとて書簡を渡し先荆州  
に立寄て江夏長沙桂陽の三郡を具に返し渡すべき由を關  
羽に告よと宣ふ伊籍急ぎ打立て荆州より關羽に達て玄  
徳の命を傳へ夫より吳の國より下向して直ち秣陵に到り  
ければ吳主孫權呼入て問て曰く汝如何して此に來れる伊  
籍申けるハ向に諸葛瑾の來り玉ひし時荆州の三郡を返し  
奉つらんと約せしがども孔明折節遠く出たるゆゑに事  
今まで延引せり此故に某を以て荆州の三郡長桂陽江夏  
を分て回さしむ元來 悉く回しやすべければ如何せん  
曹操に漢中取れて關羽身を容るの地なし今曹操遠く出て  
合淝の城空虚なり望むらくハ吳の國の勢を起して急ぎ合  
淝の城を攻取玉へ曹操必ら兵を引て都に回らん我若  
若漢中を取れば關羽を召て之を守らせ其時荆州を寸地も殘

や劉曄が曰く仲達が意見 某に同じ玄德の度ありて遅重  
なり蜀を取て日未だ久しからず人民尙心を歸せず今丞相  
漢中を取玉ひて蜀中震ひ恐る其勢ひ自づから傾かん丞相  
の神武を以て其傾かんとするを壓ハ豈勝すといふ事有ん  
や若緩々の沙汰に及びあバ文に孔明ありよく國を治む武  
にハ關羽張飛趙雲黃忠馬超おんといふ三軍に秀たる勇將  
あり之を号して五虎とす蜀の民已に定り諸處の關隘を固  
め守りあバ後にハ大いなる思をささん今速かに攻玉へ曹  
操が曰く然りと雖も我勢遠く來りて 盡く疲れ苦しむ暫  
く人馬を休息せしむべしとて兵を接住して更に動かす此  
時蜀の國にハ曹操已に漢中を取たりと聞て人民皆恐れ必  
ず勢ひに乗つて攻來るべしと云沙汰して日夜皆心を安ん  
せず風吹草の動くを聞ても膽を冷して恐れ戦さしかバ玄  
徳之を愛ひて孔明に計事を問玉ふ孔明が曰く某一ツの  
計事あり曹操原より張遼等を大将として合淝の城を守ら  
せ吳の孫權を防がしむ今辨舌の人を吳の國に遣して先荆

さす回し奉つらん今若疑ひの心を抱いて兵を起し玉はず  
んバ曹操必ら大軍を引て南に下らん其時如何して防ぎ玉  
ふべき孫權が曰く汝暫く客屋に歸れ我評議して事を定  
めん伊籍已に退きければ孫權諸の大將を呼て此事如何  
と議しけるハ張昭が曰く之ハ玄德が曹操を怕れて若蜀を  
攻る事もわらんかさて此計事を行ふものあり然れども曹  
操が漢中に在に乗て速かハ合淝を攻取れば是又最上の計事  
あり願雍が意見も 某も同じと云ければ孫權之に從ひ先  
伊籍を回らしめ魯肅を命じて荆州の三郡を請とらせ兵を  
陸口に屯して呂蒙甘寧を呼返し餘杭へ使を馳て凌統を招  
ぎよせ三軍 悉く都をさして攻上る呂蒙が曰く曹操今威  
江の太守朱光を大将として皖城を守らせ田疇を開き船を  
種て合淝の城へ兵糧を運ぶ今先皖城を取て其後に合淝を  
取ん孫權然るべしと同一て呂蒙甘寧を先手とし蔣欽潘  
璋を後備とし孫權自ら周泰陳武董襲徐盛を引て中軍を守  
り大江を渡りて和州より皖城へ推し進める那時程普黃蓋韓

皆ハ各處の要害を守りて此陣に向ひざりけり去程に皖城ハ呉の大勢將と聞て太守朱光急ぎ合肥の城ハ人を遣ひ救ひの勢を求め自ら固く守りけるが呉の大軍一度に城壁の上に攻符一息に破らんとしければ城の上より雨の降如く射下す矢に手負死人其數を知らず孫權が益々矢一ツ中りて已ま裏かく程ありければ孫權急に退き諸將と計事を議するに董襲が曰く人夫を加へて城の四方に土を築上て勢ひに乗て攻破るべし徐盛が曰く雲の梯を堅て虹橋を造り城を賈下して之を攻ん呂蒙が曰く否々御邊達の計事を皆早速の用に立難し徒らに月日を費さん此城延々に攻べ合肥の城より後攻の勢かゝるべし然る時何の時にか攻破るべき某明日城を破るの計事あり孫權問て曰く願くば聞ん呂蒙が曰く今御方の勢初めて来りて其勢ひ方に盛んあり此時に乗て三軍の銳氣を屬し四方より息をも繼ぎ攻かけ斬せも射せも顧みず乗越々々攻上らば曉さより兵を進めて午未の刻より城を取ん孫權喜び城に涼し

き計事ありとて五更に兵糧を使ひ大軍一度に城を造る程こそあれ我先にと攻上るされば城の中にも力を盡して之を防ぎ大石を抛かけ矢を射る事雨よりも繁ければ時の程に死人手負數千人に及びり中にも呉の甘寧の手に鉄の棒を提げ矢石を冒して上りけるに城の大將朱光射手を構へて弩をつるべ放つ甘寧之を事ともせず雨の降如くなる矢の中を打開き城の城壁に上りければ内へ入じとて大將朱光立塞りて攻戦ふ甘寧鉄の棒を揮つて先朱光を撃倒しければ呂蒙之を見て自ら攻鼓を打けるに呉の勢氣に乗て皆一同に攻上り朱光を寸々に砍殺しければ降人に出る者數萬人皖城已に落し時漸く辰の刻に及びり此時張遼は合肥の城より兵を分て後攻の爲に來りけるが皖城已に破れて朱光も討れぬと告げれば半途より引回し緊しく守りて戦はんとす孫權は諸軍を收め城に入て民を安んじける處に大將凌統召に應じて餘杭より來り先見へて勝軍の賀びをのぶ孫權諸將に恩賞を施し酒宴を設けて持なしけ



れバ甘寧恩賜の錦の袍を被て席上に坐と呂蒙頼りに其手柄を稱嘆し向に朱光を討て一番に城に上り玉ひしに世に双びなき手柄なりと云て酒半酣に至りける時凌統俄かに此甘寧の父を殺せる仇なりと思ひ出して恨已に骨髓に徹り又甘寧が今日の軍に獨高名して傍若無人あるを見て心怒り良久しく睨みけるが劍を抜て席上に立座中あまりに興なくしに我等劍を舞して樂をあさんといふ甘寧之を聞て其意を曉り前ある卓を推のけ兩枝の戟を取て臂に挟み進み出て我も戟を使ふて興を添んと云ければ呂蒙大いに驚き左の手に楯を持右の手に刀を掲げて二人の間に立隔り御邊達實に能舞玉ふと雖も我等が巧あるに及ぶまじと云て乃ち刀を舞し楯を擡て二人の間を推分たり早く此由を孫權に告る者ありければ孫權驚き慌しく馳來り席上に立て二人を和げ我常に汝二人必らず舊き仇を念ふ事かかれといひしに今日何とて又此の如くあるぞと叱りければ凌統劍を棄て地に拜す孫權よく二人を諭し和



げ次の日大軍を進めて合沱の城に攻かゝる去程に張遼の  
皖城の破れたるを見て心の内安からざる所に忽ち曹操が  
方より薛悝といふ者を使とし一ツの匣を送つて上に曹操  
自ら封ずと書て又傍らに敵來れば乃ち發せしめりければ  
張遼未だ發かざる所に早馬急を告て吳の孫權十萬餘騎に  
て攻來ると報ず薛悝が曰く早く匣を發き見玉へ張遼乃ち  
發き見るに若孫權來らば張遼と李典との城を出て戦へ  
樂進の城を守りて出る事なかれと有ければ張遼之を李典  
樂進に示す樂進すけるの將軍の本意如何せんと思ひ玉ふ  
張遼が曰く丞相遠く出て漢中に居玉ふゆる吳の勢皆此  
城の空虚あるを侮りて攻破らん事掌にありと思ふべし  
我今城を出て快よく戦ひ奴原に陣を潰させて其銳を折き  
諸人の心を安んじて其後に固く守りて出る事あかるべし李  
典元より張遼と不和なりければ之を聞かば黙然として  
ものいひを樂進が曰く敵ハ多勢にて御方の寡し出てハ中  
々敵對し難からん如じ固く守りて出る事あけん張遼が曰

く汝等皆私の意を以て君の事を廣すよし人の兎も角もわ  
れ我の城を出て華やかある一軍をし其後に固く守らんと  
て左右に命じて馬を引せければ李典慨然として座より起  
之の國家の大事あり豈私を以て君の事を忘れんや某  
願くは將軍の下知に従へんと云ければ張遼限りなく喜ん  
で曰く御邊若我を佐るの心わらば我明日一軍を引て逍遙  
津より北に伏吳の勢の來り過るを待て先小師橋を砍落し  
勢を分て之を討んとて討事を定めて退散せし時吳主孫權  
の大軍を引て合沱の城に近付諸軍に下知を傳へて曰く兵  
の貴神速と云り早々に攻破れとて呂蒙甘寧を先手と  
し自ら凌統を引て後に備馬を進めて攻苑りければ城中よ  
り樂進兵を引て討て出甘寧と五六合戦ひ詐り負て退け  
甘寧呂蒙勝に乘て追かくる孫權先陣の勝たるを聞て凌統  
と後陣に續いて追蒐たるに已ま逍遙津に到りける時忽然  
として連珠砲を響し左より張遼右より李典二手の勢瀾巻  
出たり孫權大いに驚き手足を張て怖れ戦ひ急に呂蒙甘寧

を呼回す時張遼兵を引て蕩地暗に討て蒐る孫權が手下に  
只三百騎許りありけるが敵の勢ひ山の崩るゝが如くある  
に氣を奪はれて戦ふべき様も無かりしかば凌統音をわけ  
君速かに小師橋を渡りて逃れ玉へと呼はる所に張遼異  
先に進み二千餘騎を引て矢を放つ事雨の如くあり凌統之  
を防ぎ命を棄て戦ひければ孫權この間に馬を飛して小師  
橋を渡らんとするに橋の南已に一丈あまり砍落したり孫  
權怖れ驚いて如何せんと思ふを凌統が加へて再び馬を乗放ち一  
者跡に續き君先馬を引戻し鞭を加へて再び馬を乗放ち一  
跳びに飛越玉へと呼はりければ孫權馬を三丈餘り引回し再  
び鞭を加へて急に乗放ちたるに那馬勢ひに乘て易々と飛  
超ければ徐盛等數御方を救へんとて船を浮べて迎へける  
孫權が橋を跳る時張遼が勢急に追掛しゆる凌統と谷利と  
又取て回し大勢の中へ蒐入火出る程に戦ふたり甘寧兵  
を引て後より蒐りければ李典が勢嚇を造りて討て蒐る呂  
蒙一軍を引て其後を遮らんとすれば又樂進が勢氣に乘て

蒐立る此に依て吳の勢大半討れて凌統が三百餘騎の一人  
も残らず討殺され凌統鎗にて數少所を撞れ朱に成て只一  
騎橋を渡らんとするに橋悉く落て而も馬渡れたれば河  
に傍て逃けるを孫權船の中より望み看て急に蓋襲に命じ  
て小船を掉して共に敗軍を收めて河より南に陣をとる此  
日の合戦餘りに烈しくして吳の勢夥しく討れしゆる人  
皆張遼の名を聞事怖れ逃來々々と申せば江南の小兒ハ  
敢て夜暗をせきといひ傳へり孫權陣中に回りに討れたる  
者を照檢するに其數あけて知難かりければ心驚いて更  
に定らず諸將悉く來り見へ至尊の乃ち萬民の主あり當  
に身を保つて重んじ玉ふべし今日の事驚き怖れずといふ  
者亦し若天地神明の擁護にあらせんや争でか今日の危き  
を免れ玉はん君よく心に記して一生の戒めとし玉へ  
と申ければ孫權涙を流して曰く我も心の内に慙慙んで肺  
腑に銘じ敢て忘るゝ事亦しとて重く凌統に恩賞を與へ兵  
を收めて濡須に回り兵船を揃へて水陸共に攻上らんとて

吳の國へ使を遣し新事の勢を催促す張遼は合淝城に回りて諸將と相議し今日逍遙津の戦ひに勝て雖も孫權尙濡須に在て水陸より攻上らんと謀る此城勢不足にして始終叶ふまじ丞相に報じて早く援けの勢を乞んとて乃ち薛脩を使ひとし夜を日に繼いで漢中へ到らしむ曹操此由を聞て諸將に問て申ける我今蜀を攻む如何劉曄が曰く今蜀中已に定りて輕々しく攻難し如し且都に回り合淝の急を救ふて吳の國を破り玉へ曹操實も同じて夏侯淵を留めて定軍山を守らせ張郃を襄陽に留めて渠山の要害を守らせ此二人に漢中を總司らしめ自ら四十萬の大軍を卒して夜を日に繼いで路を急ぎ直ちに濡須を指て攻上る

○甘寧百騎曹操を襲ふ

吳主孫權此時濡須に在て兵を調ふる所に早馬來り曹操自ら四十萬の勢を卒して漢中より此處へ攻上ると告げれば急ぎ諸大將を集めて計事を相議し先董襲徐盛に大船五十艘を列ねて濡須の口を守らしめ陳武に騎馬の勢を付て江

の碗を以て自ら酒を飲諸人に向つて我君の命を受今夜汝等を引て酒を飲む皆々力を盡して努めよと云ければ百人の兵互ひに面を見合せて其意を曉らす甘寧諸人の從はざるを見て大いに怒り手に劍を執て我の吳國の大將軍たるれども猶命を惜む事なし汝等如何あれは身を惜んで大將の下知に従ひぬぞと色を變じて云ければ諸人皆怖れ驚き坐を立て再拜して曰く願くば命を棄て將軍に従はん甘寧限りなく喜び酒肉を與へて持たし己も二更の頃に至りければ白き霧の翅を人々の盔の真甲に挟んで之を驗とし忍んで曹操が陣に到り鹿垣を打破りて鑼を鳴し鼓をうち喊を造りて直ちに中軍に打てる元來曹操が本陣に人馬車仗すき間もなく鉄桶の如く集りたれば喊の聲に驚いて上を下へと騒動す甘寧往來鑼鼓を打鳴して此に馳ちり彼に集り縦横に馳廻りければ曹操が勢周章躍いで暗さの暗し何れを敵何れを味方とも見分ねば同士討をする事敷刻あり暫くありて陣々に火の手を擧て其光星の如く喊

邊に往來して敵の來るを巡哨せしむ張昭が曰く今曹操が大軍遠く來る一人より大將に命じて先其銳氣を挫かしめん孫權諸將に問て曰く曹操此に來りて人馬盡く遠路に疲る難か之を討て其銳氣を挫く者あらん凌統進み出て曰く某願くば三千餘騎を引て敵を破らん甘寧が曰く某願くば只百餘騎を卒して敵を破らん凌統心の内怒つて共に爭ふ色に看へければ孫權乃ち凌統に三千餘騎を付て先手とし甘寧を第二の備とし濡須の口に出で敵を窺ひし凌統兵を引て出ければ向より馬煙りを擧て曹操が勢寄來り張遼先に進んで凌統と五十餘騎合戦ひ勝負更に決せざりければ孫權之を看て統統が失ちあらん事を恐れ呂蒙に命じて救ひ援けしむ甘寧進み出て孫權に告て曰く某願くば只百騎の兵を引て今夜曹操が陣を却かし若一人にても討れば大いある蓋からん孫權其願ひに應じ百人の勢兵を擧び出して酒五十樽羊の肉五十斤を賜ひければ甘寧之を受て我陣中に回り百人の兵を一行に坐せしめ先銀

の聲夥しく震ひければ甘寧南の門より討て出るに之を遮る者さらにも適々打向ふ者も甘寧が鋒先に當る事能はる是に依て百騎の兵一人御手をだにも被らず靜々と引て回る孫權又周泰に一手の勢を付半途に出で迎へければ共に濡須を指て退きけるに曹操の敵の伏勢あらん事を恐れ兵を制して追しめず甘寧百騎を引て本陣に回り皆鼓を打笛を吹て萬歳を唱へ歡びの聲地に震ひければ孫權自ら出迎へ甘寧の手を執て曰く將軍今夜の勳き曹操が魂を挫くに足れり我願くば汝が膽を見ん事を欲すとて絹千匹刀百口を賜ひければ甘寧拜して之を受百人の士卒に分與へける孫權乃ち甘寧を平虜將軍に封じて諸の大將に申ける曹操が手下に張遼あり我手下に甘寧あり共に相敵するに足りといよく重く用ひける次の日張遼兵を引て推よせければ凌統心の内甘寧が功名せしを憎み孫權に見へて某願くば五千餘騎を引て此敵を破らんといふ孫權乃ち自ら兵を引て打出甘寧を左に備へ凌統を右に備

陣を張て向ひければ張遼も馬先に出し左に李典あり右に樂進あり吳の陣より凌統刀を掲げて出ければ魏の陣に樂進鎗を撚つて苑出二人戦ひ五十餘合にして勝負わ分たず曹操之を聞て自ら陣前に出て見物しけるが密に曹休を呼んで射せよと云ければ曹休近々と張遼が後に進み能く拙て兵を射る其矢凌統が乗たる馬の胸を射洞し馬の屏風を倒すが如くにて凌統地上に落たりしかば樂進鎗を延て突んとする時矢一ツ來つて眉間の眞中を射る急所の痛手あれば鎗を打すて馬より倒に落けるを御方討す亦援けよとて兩方の軍勢齊しく出相救ふて引退く凌統回りて孫權に見へければ孫權が曰く樂進を射て汝を救ひし者の甘寧あり凌統乃ち甘寧に向つて頓首して申ける我理想ざりき足下の浩る思を施し玉へんと甘寧が曰く我主公の命に依て敵の大將を射て落し今將軍の爲に萬分の一ツを報せ凌統大いに喜び足下昔我父を殺し玉へる仇あれば今共に君に事へて殊更今日一命を授け玉へる思

あり何ぞ舊き恨を存せんやとて此より二人生死の交りを結びける曹操樂進を援けて本陣に回り鎗を抜て治療を加へ諸軍に下知を傳へて兵を五手に分ち自ら中軍を領して左の一路の張遼右の一路の徐晃左の二路の李典右の二路の龐德皆一萬餘騎を揃へて直ちに濡須を指て推將る吳の陣に董襲徐盛二人船中の大將として兵船を浮べ侍かけしが魏の勢雲霞の如くに來るを見て諸軍皆怖る色ありければ徐盛怒つて曰く君の祿を食ふて命を君に獻つる上何ぞ敵を怖る事有んやとて馬を引て小船に打乗飛が如くに岸に上り馬に乗て數百人を従へ左右を顧みき驚地暗に李典が扣へたる一萬餘騎が中へ討て入四方八面を蒐破る江に浮んだる董襲が船數百艘一度に鼓を打喊を造りて徐盛が勢ひを助けけるが俄に大風吹起り白浪天を拍て船ども悉く覆へらんとしければ吳の勢皆周章駭き小船を引下して逃れざるもの數を知せ聲々に呼り船已に沈んとす將軍速かに小船に乗て陸に上り玉へと云け

れ董襲鎗を抜て大いに怒り大將已に君の命を受けて此處に出て敵を防ぐ何ぞ敢て此を去て命を扶かるの理あらんや再びいふ者の必ず斬んとて忽ち十餘人を砍殺すされども風いよく烈くして江に浮んだる大船ども荒磯に當りて微塵にあり大浪に捲れて沈むもあり丁に一人も残らず闕れ死して扶かる者のあかりけり徐盛の李典が一萬餘騎と黒煙りを立て戦ひけるがさしも烈しき蒲風に沙を飛ばし石を走らしめて面を向ふも様もあかりしかば吳の勢皆馬武者に躓立られ討る者其數を知らず吳の大將陳武の漢の手の合戦に魏の勢勝に乗て徐盛散々にありぬと聞て自ら救へんとて來りける時半途にて龐德が勢と出合兩軍入亂れて火を散して攻取ら孫權の初めより濡須塢の中に陣をとり御方の負色に成たるを聞て自ら兵を引て馳來りけるが徐盛が李典を困れたるを見て之を救へんとする所に忽然として張遼徐晃の二手の勢前後より討て出孫權を引包んで四方より攻たりけり曹操の高き阜の上より之を望

み誰か吳の大將を討取て孫權を擒にせんと云ければ傍らに在ける許褚刀を舞し馬を飛せて吳の勢の眞中に突入奮るを幸ひに切て廻りければ吳の勢其勇に敵する者あく荒けて二手に分れまた一處に集り得ず魏の大軍緊しく圍んで賊の聲大いに響きければ吳の大將周泰大音あげ斯ての大第一力疲れて一人も扶る者あらじ一方を打破りて早く圍みを出よといふまゝに鎗を撚つて敵の大勢叩へたる中を蒐通り裏へぬけ出て波打際より馬を止め後を顧みるに主人孫權圍を出る事能はせ右てハ叶ふまじとて又取て回して大軍の中へ苑入御方の兵に逢て君の行術や知たると問われある馬烟を立て取ら處に君の定めて圍れ玉ふらんと申す周泰之を聞て直ちに馬を打て馳入縦横に蒐通りて尋ねれば案の如く孫權備ある兵を率して自ら散々に攻取ら周泰大音あげ某が跡に付て出玉へと呼り眞先に進んで圍を開き江の邊にツト苑出して後を見るに孫權又魏の勢に圍れければ取て返して尋ね逢ひ周泰此よわ

り早く出玉へと云ければ孫權申けるハ敵督を放つて矢の来る事雨の如し是に依て出る事能ハき周泰が曰く君然らば前に進み玉へ某後を防ぐべしとて勇を振ひ力を盡して敵を拂ひ其身も宋にあつて血の流る、事泉の如く孫權を守護して漸く江の邊に出ければ呂蒙一軍を引て船手より上り追かくる敵を遮りて孫權を扶けて船に乘し孫權曰く今周泰が三度まで墮入て扶くるにあらざるハ我争でか虎口を連れん徐盛敵に圍まれて今に出る事能ハず如何して之を救はん周泰が曰く某再び行て救ひ來らんとて鎗を掲げて敵の群りたる中に喚いて墮入徐盛を救くふて共に圍を出けるが二人共に深手數ヶ所被り岸近く成て追驚る敵を又戦ひければ呂蒙急に船を推寄射手を双べて敵々に射させ敵を拂つて遂に二人を救ひ回る吳の大將陳武の初め魏の大將龐徳が一萬餘騎と火を散して揉合けるが續く御方あくして其勢残り少きに討れ山際に逃入けるを龐徳勝に乗て之を追こと甚だ急かり陳武動もすれば

取て回して取ひけるが樹木の茂りたる所にて急に追付られ引回して取らんとする時運命の盡にや鐵の袖木の枝に纏ふて快よく働き得ざるを得たりと龐徳鐵刀の柄を取の腰より二ツに斬て落す曹操は孫權が逃るを見て自ら馬を飛して江の邊に追かけ數刃の射手を出して矢を射かけさせれば吳の船も呂蒙兵を下知して散々に射る吳の勢は今朝よりの軍に矢種皆射盡して之を防ぐべきやうさく船の内大い亂れて事已急なる處に忽ち沖中より數百艘の兵船一度々喊の聲をあげ飛が如く一應來り吳先ある大將は乃ち吳の孫策が婿に陸遜字ハ伯言といふ者あり自ら十萬の勢を率して矢を放つ事雨の如くありしかば曹操射立られて引退く陸遜勝につて、尽く岸に上り曹操を追かけて時うつるまで取ひしかば曹操が勢騒ぎ亂れて討る者其數を知らず甲を拜益を落して散々に走りけり陸遜大いに打勝て敵の馬物具を奪ふ事數千疋死人の中を尋ねて陳武が屍を求め出し又船中に回りに孫權に見へければ

孫權陳武が敵に討れ黃蓋が水に溺れたる由を聞て聲を揚て哭き水練を入て其屍を求め共に厚く拜らしめ敗軍を集めて濡須の本陣に回り周泰が我を救ひし功を思ふて宮中に酒宴を設け自ら盃を把て周泰が前より其脊を撫涙を流して申けるハ汝ハ是我兄弟あり戦ふ事熊虎の如くにして性命を惜まず敵ヶ所の瘡を被りて膚ハ一寸も續ける所なし我何ぞ實の骨肉を以て相親み軍中の大事を任せざるべきや汝ハ乃ち我功臣あり我汝と榮辱を共にし休戚を同ふせんとて衣を脱せて諸大將と逼く身の瘡を看るに皮肉盡く刻み画けるが如くにしてあき處あかりければ孫權手を以て其瘡痕を指て尋ね間に周泰一々之を答へ此瘡は何の合戦に誰に切れし所ありと盡く語りければ孫權大いよ稱嘆し瘡の數に應つて一瓶の酒を賜ひけり周泰甚だ酔て恩を謝して退きければ孫權青き羅の蓋を張せて其功を耀かし相親むこと骨肉に過たり其夜の諸將皆恩賞を賜りて共に濡須の要害を守り兩軍相拒んで一月餘りに

及びければ張昭顧雍申けるは今曹操勢が大いに力を以ては争ひ難し若く久しく戦はば多く兵を損ずべし如し和睦を求めて民の苦みを救ふべし孫權之に従ひ歩隊を使として曹操に和睦を求め毎年貢物を献らんを願ひければ曹操も急に破り難きを看て了に許容し孫權先兵を引て國に回れ我も都に上らんとぞ答へける孫權之に因て蔣欽周泰を留めて濡須の口を守らせ大軍を引て自ら秣陵に回りければ曹操も曹仁張遼を合淝の城に留め置て都へ上りける

○魏王宮に左慈 孟 詵を擲つ

建安二十一年曹操合肥の城より都に回りければ諸人相續し尊んで魏王とせんとす侍中王粲時を献りて其徳を稱しける其詩に曰く

從軍有苦樂 但聞所從誰 所從神且武 安得久勞師 相國征關西 赫怒壓天威 一舉滅勳虜 再舉服羌夷 西收三邊賊

忽若二俯拾遺 陳賞越三山岳 酒肉踰三川抵一  
軍中多醜沃 人馬皆溢肥 徒行兼遠乘  
空出有餘資 拓土三千里 往返速如飛  
歌舞入三湘城 所願復無違

曹操之を見て限りなく喜び了に王位に昇ると請しければ  
尙書崔琰進み出此事決して無用ありといふ諸官皆怒つて  
申けるの御邊何故に強て諫め玉へる荀彧程昱を見玉はず  
や崔琰幣を勵して曰く汝等が如き者ども利を貪りて道を  
忘る我何ぞ其穢しきに從はん或人此由を曹操に告けれ  
ば曹操大いに怒り崔琰を捉へて獄に下す崔琰少しも恐れ  
ず目を怒し牙を咬聲をあげて曹操の漢の天下を奪ふ逆賊  
ありと罵りければ曹操乃ち廷尉に命つて獄中にて擊殺さ  
しむ夏五月諸々の官吏帝に奏して申けるの魏公曹操功高  
く徳隆んにして天を極め地を際る伊尹周公も及ぶ事能ハ  
ず宜しく王位に進むし之に依て帝已事を得る鐘繇に命  
じて詔書を草せしめ曹操を册立して魏王と封じ玉ふと雖

も仮に上書して固く王位を辭し申ければ帝又手づから  
詔を下し玉ふ曹操之より王位を受て十二旒の冕を戴き  
金銀の車に乗て萬づ天子の儀を用ひ出るに警し入ら  
て鄴郡に魏王宮を造り世子を立んと議しけるが元來大妻  
丁夫人の丁に子なくして妾の腹に出来たる子數多あり劉  
氏初め曹操を生しが皖城の軍に討死す卞氏四人の男子を  
生り曹丕曹彰曹植曹熊あり此故に丁夫人を黜けて卞氏  
を正宮と定む第三の子曹植字の子建幼きより極めて  
聰明に筆を揮つて能文章を作りしかば曹操之を愛して世  
嗣とするの心あり嫡子曹丕此 企を知て心の中安からず  
曹大夫買羽を召て密に此事を問けるに買羽耳を付て低語  
君世を嗣の望みあらば我敢に任せて箇様くにし玉へと  
云ければ曹丕實もと喜ぶ或時曹操自ら征伐に出る時諸  
の子弟悉く出て城外に送る曹子建の時を作りて功徳を  
述べ文を造りて別を惜みければ左右の諸臣其巧を稱し曹  
操も心の内に喜ぶ只曹丕の別れに臨んで涙を流して拜送

しければ左右の諸臣も共に哀を催して別れを傷の情を  
起せり是に依て曹操疑の心を生じ曹子建只詩文の中に巧  
を術ひ文字の間に心を托て父を慕ふの誠の曹丕に及ばず  
と思ひけり曹丕又密に金銀を以て父の傍らに侍る者共を  
賂ひ懐け時々己が徳あるよしを云せしかば曹操己に魏  
王の位に昇り世子を立んとして心ざらに決せず乃ち買羽  
を問て我世子を定めんと欲す何れの子を立べきぞと云け  
れば買羽黙然として物いはず曹操其故を問に買羽が曰く  
某ハ深く心よ存する旨ありて答へ候の事曹操曰く如  
何ある所存かある買羽が曰く袁紹劉表父子を思ふのみあ  
り曹操大いに笑ひ了に心を決して五官中郎を立嫡子曹丕  
を以て王世子と定む冬十月又魏王宮己に成就しければ四  
方の國々へ使を遣して土産の名物菓木珍奇の物を求めさ  
せ吳の國の福建の荔枝龍眼の壽上あり温州の柑子の名物  
ありとして使を以て吳の孫權に柑子を取て上せよとて魏王  
の令旨を傳へければ此時孫權己に年々貢物を獻らんと

約せしゆゑ其命に背く事能ハぬ温州の大いなる柑子を選  
び集めて人夫に擔ひせ四十荷餘りを都に送る吳の國の人  
夫中途に至りて皆疲れしかば山の傍らに荷を下して暫く  
休みける處に一人の老人片目ハ眇にて一方の足跛なるが  
白き藤の冠に青き色の衣を着して忽然として出來り禮を  
作て申けるの汝等皆重荷を負て疲れたるか我助けてとら  
せんとて一人の擔ひたるを取て自ら肩にのせ我に續いて  
來れといひければ數百の人夫皆一度に擔ひ五里許り來り  
けるに肩の上其輕き事物なきが如くありければ疑ひ怪し  
ませといふものおし時に彼老人奉行に向いてやけるは我  
は乃ち魏王曹操と同郷の友にて左慈字は元放とて道号を  
鳥角先生といふ者あり御邊都に上りて曹操に見へなば某  
が申せし事を悉く語り玉へと云て袖を拂つて去にけり斯  
て程かく鄴郡に上り孫權温州の柑子を送れりと云ければ  
曹操甚だ喜び實に大いなる柑子かなとて自ら取て之を剖  
に只空しき殼ばかりにて内に實あるハ一ツもなしコハ如

何にと驚き怪んで其故を問に奉行乃ち途にて左慈に逢たるよしを有の儘に語る曹操甚だ疑ひをさす處に外より報トて曰く只今一人の先生自ら左慈を申て出来り大王に見へんど願ひひ曹操乃ち呼入れれば呉の國の奉行之を見て途中よて出合たる人ふ紛れあしとす曹操叱つて申ける汝何者なれば怪き妖術をなして我受する柑子の實を取たる左慈笑つて曰く之ハ如何ある事を仰せしむぞ某曾て左慈の事をせせ試みよ剖て見んとて柑子を取て自ら剖に悉く實ありて其味極めて甜し曹操大いみ怪しみ又自ら之を剖に皆空しき殼計りなりければ心驚いて安から左慈座を賜ふて其故を問に左慈願くハ酒肉を與へ玉へといふ之に因て左右に命じて酒五斗を飲しむれども更と酔たる色なく又大いある羊之殘さ老食しむれども曾て飽たる味もあし曹操驚いて曰く汝何の術を以て此の如くある左慈答へて曰く某ハ西川嘉陵の峨眉山に在て道を學ぶ事三十年或時俄に石壁の中に聲ありて累りよ我名を呼け

るゆゑ我之を願れども更に物ありとも見へず此の如くある事數日ありしに忽ち雷震つて其石壁悉く碎け中に天書三卷あり之を讀甲天書と名く上巻を天遁と云て雲に騰り風に跨り大虚に飛揚して自在をなと中巻を地道と名く能山を穿ち石に入下巻を人遁と名け四海に雲遊して形を變し身を變じ劍を飛して能人の首を取今大王人臣の位を身に極め玉ふ功成て退くハ古人の好とする所なり早く官を退いて某に跟ひ共に峨眉山に入て修行し玉へ願くハ三卷の天書を授けん曹操が曰く急流ハ勇退す我身を安んじて閑なるを樂んと思へども朝廷未だ我に替りて政事を治る人あし左慈が曰く蜀の劉玄德ハ漢の天子の宗親なり汝何ぞ此人に位を譲りて身を安く保ざる若之に順ハずんば我今劍を飛して必らず汝が首を取ん曹操怒つて曰く奴ハ是玄徳が方の間者なるぞ急いで拷問せよと下知すれば左慈手を撫て大いに笑ふ數十人の獄卒ども來り集り左慈を擲て皮肉の微塵よなるはせ擧たりけるに左慈敢て

痛る色なし怪んで能々見ればく睡入て胸の音雷の如し曹操餘りに興を醒して鉄の枷を首に入鎖を以てよく鎖し送りて牢に入けるに忽ち枷も鎖も紛々として悉く落左慈地上に臥たりければ曹操大いに怒り對夜七日が間飲食を與へず憐々に責ければ左慈地上に端坐して顔色常よりも猶壯んちり曹操問て曰く汝如何なれば此の如くある左慈が曰く我數十年物食すども餓る事なく一日に千疋の羊を食ふとも飽事なし曹操之を聞て爲べき様なく了に責を聞きけり次の日諸々の官人皆魏王宮に集り國々の名物を揃へ山海の珍味を調へて酒宴する所に左慈高き木履を踏で席上に立ければ諸官ことごとく驚き怪む左慈が曰く今日の酒宴群臣を請うて四方の珍味を盡し玉ふ何にてもあれ御望みの物あらば我願くば取出して献つらん曹操が曰く我龍の肝を羹にして食へんと欲す汝之を取べきか左慈が曰く此に過たる易き事やあるとて筆を執て粉壁の上に一つの龍を画き袖を以て之を拂へば龍の腹自



づから開けたり乃ち手を腹の中に入龍の肝を搜り出すに紅の血流れて休す頓て之を献りければ曹操驚いて申けるハ汝元來袖の中に龍を藏して來れるならん左慈が曰く今天氣甚ハだ寒ふして草木皆枯たり大王如何ある花をか求め玉へる望みの儘に花を出さん曹操が曰く我只牡丹の花を求む左慈が曰く最易き事ありとて大いある花瓶を席上に出し水を以て澆ぎければ須臾の間に爛妍たる双頭牡丹忽ち生じて香ひ春風に飄へるかを怪しむる諸官奇異の思をなし相迎へて坐を同じうし共に酒を飲ければ庖人又魚の膾を進め來る左慈が曰く是程なる酒宴に何ぞ松江の鱸を取て贈にハ玉ハざる曹操が曰く松江ハ此より千里の遠きを隔たり安んぞ鱸を求る事を得ん左慈が曰く易き事なり我取て進せんとして釣竿を取て堂を下りければ庭上俄に池水沸出たり即ち釣竿を持て須臾の間に大なる鱸を得る事數十疋に及び之を取て進めければ曹操申けるハ我池の中原より此魚を放し置り左慈が曰く大王何

故に詐りを宜ふぞ天下の鱸ハ皆肥ニツなり只松江の鱸ハ肥四ツあり之を以て證據とす諸人怪んで之を見るに果して肥四ツありければ愕然たらせといふ者なし左慈が曰く古より松江の鱸を膾にしてハ必ず紫芽の薑を用ふ曹操が曰く汝今薑を取らんや左慈が曰く甚だ易しとて金の盆を取よせ袖の中より紫芽の薑を出して曹操に献りければ曹操自ら取て之を見る時忽ち盆の中に一卷の書あり孟徳新書と記したれば開きて之を見るに我軍機の秘密を録して曾て人に知せざる書なりしに初より終に至るまで更に一字の差もあかりしかば心中大いに怒り吃と打見て左慈を殺さんとするの心あり左慈其色を見て卓の上なる玉の盃を取酒を十分に受て曹操に進め大王此酒を飲玉ハ千歳の壽を得玉ハんと云ければ曹操が曰く汝且之を飲ハ左慈乃ち冠の上なる玉の簪を取て盃の真中を横切先其半バを飲で又曹操に献つる曹操之を飲よ水の如くなりしかば叱らんとする時左慈盃を取て

空中は舞たりしは忽ち一ツの白鳩と變じて殿中を飛廻りしかば滿座之は驚き仰いで見る間左慈ハ行方なく失にけり曹操近侍の者を召て其行衛を尋ねさせければ只今宮門を出たりとやす曹操いよく怒り許褚を呼で屈強の精兵五百餘騎を授け急ぎ追蹙て捉へ來れと下知すれば許褚即ち馬に打のり城門を出て向ふを見れば左慈高き木屐を穿ていと徐かよ歩みさる許褚馬を飛して雷光の如く追ければ左慈も左慈ハ只目の前にのみ有て追付こと能はず已ま追かけて山の麓に到りければ一簇の羊ありて左慈其内に立ちたり許褚弓を取て矢を放ちければ左慈忽ち羊と成て何れを夫とも見分ねば許褚遂に數百の羊を悉く打死して兵を引て回りける途中一人の童子あり我牧ひ置し羊を何ゆゑハ斯ハ殺したると云て大いに哭く時に傍らの地上に人の頭一ツあり童子を呼で申けるハ汝羊の死たるが哀しくんバ羊の首を悉く繋めて皆死たる羊の腹の上に乗おけ我本の如く生せとらせん童子之に従ひ向に許褚

が殺して棄たりし首を繋めて羊の腹に載ければ左慈忽然として躍り出之に従つて數百の羊悉く活返れり童子家に歸りて其由を語りければ家主の夫あまりに怪しく思ひ曹操に見へて詳かに訴ふ曹操心に安からず思ひ繪圖に形を寫して通く左慈を尋ねさせければ三日を過ぎるに片目ハ眇にて一方の足亦ハ白き藤の冠ハ青き色の衣を着たる老人抱て少しも違ざるを四五百人捉へ來る曹操諸々の大將に命じて羊猪の血を澆せ城の南なる軍兵を訓練する馬場に出出して自ら大軍を以て十重二十重に取圍と一人も残さず首を刎けるに皆一道の青き氣となり空中に立上りて忽然として一處に聚り化して左慈を成けるが自ら手を以て招き白き鶴に打乗て雲の上を飛揚し掌を拍て大いに笑ひ玉鼠隨ニ金虎一好雄一旦休と呼りければ曹操諸將を下知して弓鉄砲を打かけしに忽然として狂風吹起り沙を飛し石を走らせ適に斬たりし死人の屍悉く跳り動き手に其首を掲げて演武堂に走り上り曹操に打

向ひければ文武の諸將驚ひ怖れて皆魂を失ひ膽を冷して逃走するも何くともなく哭き聲を聞へて須臾の間には原静りの諸人曹探を扶けて宮中に入れれば之より病を受けて如何に治すれども其驗なし

○曹探神卜管格を試む

曹探重病を受けて太史丞許芝を許昌より呼寄病を卜へりめんど云ければ許芝申けるハ大王世に管格といへる卜の名人ある事を聞王へるか曹探が曰く我灰其名を聞き願くば其才の詳なるを語れ許芝が曰く管格字ハ公明平原の人なり親甚だ醜ふして外戚儀を難へる酒を好んで疎狂なり八九才の時より天文を視る事を好んで人よ遇てハ其名を問夜ハ睡らずして星辰を考ふ父母之を止むれども更に休す常にすけるハ家鶏野鶴も自ら能時を知いかに況んや人の世よあるをや世天文を知ざるべきやとて里の小兒と戯れ遊ぶも沙の上に天文を書き日月星辰を分ち布て指照して之を見る年長するに及んで深く周易を明め仰

射死して客を持成といひければ僕矢を取て籬の上なる鷄を射るに誤つて鄰の家の女よ中り左の肩より血流れたり此の如き不思議の驗ありけるゆゑ安平の太守王基之を聞て其家の妻情願頭風を病其子前ハ心痛を苦み一家の人時ならず驚き隠れければ乃ち管格を請て卜ししむるに管格申けるハ此堂の西に死人の屍二つあり一人ハ矛を持一人ハ弓矢を持其頭ハ壁の内に入りて脚ハ壁より外にあり矛を持たるハ頭を刺しことを主とる此故ハ頭風痛んで擧る事能ハ走弓矢を持たるハ骨を刺しことを主とる此故ハ心腹痛んで飲食する事能ハ走葦の外に浮れ遊んで夜ハ又家に回る此に依て人を驚かしむるなり太守甚だ怪みながら堂の西を掘りければ地の下八尺許りにして果して二つの棺あり一ツの棺の中に矛あり又一ツにハ角の弓と木の矢とあり皆朽爛れたりけるを骸骨と共に城外十里餘り去て地中に埋めければ家内之より平安なり又館陶の令諸葛原といふ者新に新興の太守に遷る管格之を送りければ座客

いて風角を觀る眼よく神に通ず其父曾て瑯琊即丘の長たりし時管格年十五歳書を讀で日に數千言を記す四方の學者皆及ぶ事能ハす天下号して神童と稱す後に居民郭恩といふ者兄弟二人皆慧の疾ありければ管格を招いで卜せけるハ管格が曰く今卜て卦を考ふハ御邊が家に本女の墓あり必ず御邊が叔母の魂ならん是昔饑饉の年僅かハ數升の米を賣つて叔母を井の底へ推落しけるハ噴々として聲あり大いなる石よ當つて其頭を碎き水の底よて痛く苦んで死したりし恨みに依て御邊兄弟天の責を受けて此疾あり郭恩之を聞て涙を流して地よ伏し我昔果して活る事を爲りと懺悔して數日の間管格を家よ留め置けるに或時梁の上に鳩一ツ飛來つて嗚聲甚だ哀かりしかハ管格之よ卜て曰く今日午の刻に家主の親き人東方より猪の肉ハ濁酒とを携へ來り賓主共ハ碎て笑ひ樂む中に必らず少し驚く事あらん此日果して煖酒肉を携へ來り郭恩兄弟と共に飲で笑ひ懼ふ處に郭恩家に使ふ僕に命じ鷄を

昔曰く御邊ハ卜の名を得たり願くハ物を齎して之を問ん太守乃ち燕の卵と蜂の巢と蜘蛛とを各々三ツの盆に入よくく瘞して卜せければ管格卦を考へ盆の上に書附て曰く其一ツハ合氣須變依三千堂字一雌雄以形羽翼舒張是燕の卵なり其二ツハ家室倒懸門戶聚多藏精育毒得秋乃化是蜂の巢なり其三にハ數脈長足吐絲成羅尋網求食利在昏夜是蜘蛛なり滿座之を見て悉く驚く其後管格が郷に牛を失ひたる女あり來りて卜を頼みければ管格申けるハ北溪の西に七人して此牛を殺せる者あり速かに往て尋ねば皮と肉とハ猶あらん其女行て見れば果して屠の舎に七人の男集りて牛を煮て食けるが皮と肉と猶殘れるあり其女急き郡の太守劉郁に訴へければ即時に七人の男を捉へて罪を糾し其女は何とて之を知たると問に管格が卜たる由を語る太守心に信なりとせ屯乃ち召よせ之を試ん爲し印の蓋と山雞の毛とを盆の中に藏して卜せければ管格が



曰く一つハ内方外五色成文合寶守信出則  
有章之印の畫なり又一つハ巖々有鳥錦味朱衣羽衣  
鳴不し晨之山鶏の毛あり太守大いに驚き以ての外に  
尊び敬ふ或時春の暮に野邊に出て逍遙しければ一人の美  
少年田の畔にあり管轄道の傍らよ立て良久しく見けるが  
汝ハ如何なる人ぞと問ハ少年答へて曰く趙顔といふ者に  
て年十九歳なり管轄が曰く汝が眉の間は死氣あり三日の  
内に必ず死せん吾ハ乃ち管轄なり汝が美しく妍を見て  
早く死ん事を惜ひなり趙顔の如何に驚き家に回りに  
父に告げれば其父急ぎ走り來り涙を流して地を拜哭し願  
くを我子を救ふて給玉へといふ管轄が曰く是天命なり我  
如何して救ふ事を得ん其父大いに哭いて曰く老父只此一  
子あり若死せば如何すべし願くは憐れみを垂玉へ管轄も心  
の内憫れに思ひ汝若子の命を救はんと思ひ、淨酒一樽  
と鹿の脯とを持って明日南山の内へ遣はせ大なる樹の  
下ニ葦盤ありて二人對して葦を打ものあらん一人ハ南よ

向て座し白き衣を着て其貌極めて醜し一人ハ北よ向つて  
座し紅の衣を着て其貌甚だ美し乃ち二人ハ酒と肉とを  
斟め其盡る及んで哭いて命の知きを告げ必ら老壽きを増  
べきぞ相携へて我救へたるを申す事なかれと云ければ其  
父喜んで管轄を家に留め置次の日趙顔ハ酒と肉とを持せ  
南山の内に赴き一己に山に入ること五六里にして果して  
茂りたる樹の下石の盤あり二人南北よ對して葦を圍み  
全く傍らを顧みる事なかりしかば趙顔さては是なりと思  
ひ跪いて酒と肉とを進むるよ二人共に葦を圍む必計り  
にて覺へ老酒を飲盡せり趙顔哭いて地に拜し願くは某  
が命を救ひ玉へと云ければ二人初めて大いに驚く紅の衣  
を着たる人申けるは是必ら管轄が所爲にてはらん我二  
人已に私の施を受く是を憐れずんば叶ふまじ白き衣  
を着たる人懷の中より錒を取り出し考へ見て申けるは汝  
今年十九歳なり我今十の字の上に又九の字を添ん汝必ら  
今九十九年の壽を保べし汝回りに管轄に見へば再び天

機を漏し事なかれ必らず大いなる罪あらんと申せと云て  
紅の衣を着たる人筆を取て薄九の字を添けるが俄に  
異香風に飄り二ツの白き鶴と化して天より失にけり趙  
顔家に回りに右の趣きを告げれば管轄が曰く紅の衣を  
着たるハ南斗あり白き衣を着たるハ北斗なり趙顔問て曰  
く我北斗の星ハ其數九ツありと問しが何故に一人ある管  
轄が曰く散じてハ九ツとあり合してハ一ツとある北斗ハ  
人間の死せるを記し南斗ハ生るを記し今薄に九の字を添  
たり汝何の憂かあらんと云ければ父子喜んで再拜す管轄  
之より天の機を漏さん事を恐れて其後ハ人の爲よトハ  
是箇様の不思議ある者にては今平原郡にあり大王之を召  
て問玉へと附りければ曹操大いに喜び急ぎ使を馳て招ぎ  
よせ左慈が事を附りてトはせければ管轄答へて曰く之は  
皆幻術とて奇妙とするに足す何の思ふ事かあらん曹操之  
を問、即時に濃氣の開くる心地しければ又天下の事を  
トはしむるに管轄が曰く二八續續黃豬過虎定軍之南

傷折一股一又算數をトふて曰く獅子宮中以安二神位一  
王道鼎新子孫極長曹操が曰く願くは又拜かよ  
聞ん管轄が曰く茫々たる天數預じの知べからず後に應驗  
あらば方に留り玉ふべし曹操又雲ハ龍に従ひ風ハ虎に従  
ふの意を論じて曰く龍動く時ハ暴雲起り虎咆く時ハ谷風  
生ず是火星ハ龍參星ハ虎なる所以にして火出る時ハ雲應  
し參出する時ハ星到る此乃ち陰陽の感化にて龍虎の致せる  
所よあらん管轄が曰く夫事を論するよは宜しく其本を  
論して然して後に其理を求むべし理達ふ時ハ機を露  
る機露る時ハ榮辱之をまざる若參星を以て虎とする時ハ  
谷風更に雲霧の風にして栗風の名はあかるべし此故に龍  
ハ陽の精にして潜るを以て陰と幽靈上に通じ和氣神に  
感じて二物相扶く故によく雲を起す事を得夫虎ハ陰の精  
にして陽よ居る木に依て長く嘯き巽林に動く二氣相感じ  
て此故に龍風を生ず磁石を以て鉄を取が如き其神を見ず  
して金目づから來る之相感せる徴あり況んや龍も潜飛

の化わり虎も文明の變わり雲を招き風を招き事豈少しも  
疑ふ事あらんや曹操が曰く夫龍の淵ある一井の底も過  
ず虎の山に嘯く百歩の中を出ず形氣浸弱にして通ずる處  
の者近し何ぞ能變を起し風を生ずる事を得ん管轄が曰く  
大王見玉のせや陰陽の掌握の中に在ても上の太陽の火を  
引き下の太陰の水を引く嘘吹の間烟景以て集り苟も精  
氣相感する時無象二燈に應じ苟も相感せざる時二  
女同居せるが如くにして志を相得ず自然の道皆遠近の  
らんや曹操大いに喜び用ひて太史の官にせんと云けれバ  
管轄が曰く某が人相の官を得べき相よわらず此故に命  
を受ず曹操問て曰く如何なる故ぞ管轄が曰く某の額に  
巫骨なく眼に守睛なく鼻に梁柱なく脚に天根なく腹も三  
王なく脊に三甲なし只泰山に在て鬼を治すべし生る人を  
治する事能はざる曹操問て曰く我相の如何なる相ぞ管轄が  
曰く位己の人臣を窮め玉ふ何ぞ相の善惡を論せん曹操再  
三問けれども管轄笑つて答へず曹操又手下の大將を問に

管轄が曰く曾世を治もの名臣ありて吉凶を問ども敢て  
答へず曹操又吳と蜀とを卜ひしむるに管轄封と設けて  
曰く吳の國に一人の大將を失ふべし蜀の國より兵を起し  
て界を犯すべし曹操未だ信せざる所に忽ち合流の城より  
早馬來り吳の陸口を守る大將魯肅病を受けて死した力  
を報ず此に驚き即時に人を漢中に遣して消息を討しむる  
に數日ありて早馬來り蜀の玄徳よく國中を平定し張飛馬  
超を大將として大勢を下舟に指し漢中へ攻蒐ると告けれ  
バ曹操大いに怒り兵を起して蜀を伐んと謀しけれバ管轄  
之を卜ひて曰く大王未だ輕々しく都を離れ玉ふ事なか  
れ來春都の内に必らそ火の災ひあらん曹操之を聞より  
管轄が詞こごとくく驗あるを以て蜀に向ふ事を斷ら其身  
ハ蜀都に留り居て曹洪より五万の勢を授け早く漢中へ行て  
夏侯淵張郃に力を添要害を守りて蜀の敵を防しむ  
○耿紀章兗曹操を討つ  
曹操漢中へ大勢を指し管轄が都の内に火の災ひあらん

といふを聞て心の中易からず夏侯惇に精兵三万餘騎をつ  
け都の中より往來して不虞の災ひを防しめ又長史王必を大  
將として御林の軍馬を總攝せらせけれバ主簿司馬仲達諫  
めて曰く王必の酒を好んで性緩し恐く軍中の大事を誤  
らん曹操が曰く王必の久しく我に従つて多く艱難を涉り  
忠にしてよく勤む其心鉄石よりも固し眞に國の眞臣なり  
とて了に王必を大將として東華門の外に陣を取しむ時に  
耿紀字の季行といふものあり元丞相府の掾たりしが後に  
侍中少府に遷り司直章兗といふ者と交る事深し曹操が自  
ら魏王に昇り出入皆天子の車服を用ふるを見て心の中安  
からず建安二十三年春正月耿紀章兗と共に酒を飲けるが  
密に詔して申けるハ曹操天下を奪はんとする事久し我等  
ハ皆漢朝の舊臣豈同じく惡をなすべけん章兗が曰く我  
友に金祿といふ者あり乃ち漢の金日磾の後よして常に曹  
操が逆心あるを恨み之を殺さんとする心あり此人又王必  
と深く交る若共計事をなすハ大事必らず踏んん耿紀が

曰く王必の無二の曹操方なり金祿若此人と交らバ安んぞ  
我れと與せん章兗が曰く然りと雖も其意偏へに漢を扶くる  
の忠を存す我等行て其志を試みんとて二人共に金祿が  
宅へ行禮了りて座定り章兗申けるハ御は王必を厚く交  
り玉ふ吾等此故來り頼む御が曰く頼み玉ふハ何事ぞ  
章兗が曰く我聞魏王曹操近き内に漢の天下を紹玉ふと若  
然らバ御邊高く官に進み玉ハ願くハ日頃の好みを忘れ  
ず曲て我等を捨玉ハずんハ平生徳を感ざる事深からん金  
祿之を聞て大いに怒り袖を拂つて座を起ち從者の茶を持  
來れるを奪ひ取て地の上より抛たりしかハ章兗申けるハ日  
頃の好み何とて斯の情なき位祿が曰く我御邊と厚く交る  
者ハ御邊ハ漢朝の舊臣なるを以てなり今其本報ざる事  
を思ハせ却つて逆賊を輔んといふハ何事ぞ我何の面目わ  
りて御邊と共友たらん章兗が曰く之天數なり順ハずん  
ば叶ふまじ金祿之を鬪牙を咬でいよく怒りけれバ耿紀  
其忠義の心見定めて我計事の秘を告るハ金祿が曰く我

等ハ是數代漢ノ厚恩を受たり何んぞ逆賊ニ從はん御邊二人漢を救ふ心あらば如何なる計事を用ふべき章晃が曰く我等皆國に報ずるの心あれども未だ宜き計事なし命章が曰く我内外より相圖を合せて先王必を殺して其兵權を奪ひ天子を扶けて蜀の立德を外の援と仰まば曹操を伐ん事難しあり二人是を聞いて共に頓首してやけるハ若此の如んバ事必らず難はん命章が曰く此に兄弟二人あり元より曹操と大いなる仇ありて城外に逃る乃ち大醫吉平が子にて兄を吉遼といひ弟を吉穆といふ昔父の吉平ハ董承と共に曹操を殺さんとして事露れ却つて曹操に斬れたり我今之を以て羽翼とあさん耿紀章晃然るべしと喜ひければ命章乃ち吉平が子を招ぎよせ右ハ趣きを告て語らひけるよ二人皆感激して涙を流し恨氣天を突擡つて賊を殺し君を扶けて父の恨を雪んと申すさらバ計事を運らせとて五ハ志を合せて相諭するに命章が曰く正月十五日の夜は上元の佳例にて都の中皆燈火を張て遊び樂び歌紀と

章晃とハ共に家内の旗を引具し直ちに東華門の外より行て王必が陣を窺ひ内に火の起るを相圖に伐て内外より攻て王必を討取玉ハ其後の我と皆一手となり禁裏に入て天子を五鳳樓に出御なし奉つり百官を召て民心を安んせしむべし吉遼兄弟ハ城外に火を放つて聲々に國の賊を誅して漢室を扶くと呼はらせ城内の救ひの勢を遮り天子の勅命ありて民を安んじ玉ふを待兵を進めて鄴郡に推寄曹操を生捕玉へ然らば綸旨を以て蜀の立德を召上せ再び漢を起すべし期に至りてハ初更を限りに打起べしとて天と誓つて血を飲り計事を定めて各々皆家に回る去程に正月十五日に至りければ耿紀章晃ハ家内の儻四百餘人を集め吉遼兄弟ハ三百餘人を集め尽く武器を揃へて兼てハ獵し出ると沙汰しける命章乃ち王必が陣より行今魏王の威勢天下に震ふて海宇長平安なり例ハ如く今夕ハ燈火を張て太平の氣象を顯せべしと云ければ王必實もとて多陣々に燈火を連ね天上の月に光を争ふて皆營中にて酒



を飲笑ひ樂む所に忽ち陣中に賊を作りて二ヶ所より火を掛たり王必ありて忙し走り出て何事ぞと問に上下騒ぎ乱れて右往左往に騷動す切ハ敵此内に在と思ふて馬に打乗南の門より出ければ耿紀此處より攻來り王必ありとハ更に知老只敵の逃るぞと心得て弓を取て矢を放ちけるに王必肩を射抜れ已に馬より落んどしけるが又西の門より出て走るに後より敵の追事急なりければ馬上にハ休へ歩立となりて命章の家に到り此を開けと呼はりければ内にハ男一人も亦く只女許り有けるが門を叩くを聞て命章が回りたると思ひ女房自ら出迎へ如何に王必を早討取玉へるかと云ければ王必大いに驚き扱ハ今夜の騷動ハ耿紀のよまわらず命章が所爲にて内より陣屋に火をかきたる者なりと悟り曹休が宅へ行て此赴きを語りければ曹休驚き甲取て打かけ千餘騎を引て馳來りけるに城中ごとく火起つて五鳳樓に焼付しかハ帝ハ深宮の中へ逃かくれさせ玉ハ曹氏の一護宮中を固く守りて命を惜まず防ぎ戦

ふ今夜敵の呼ひを聞かば曹賊を殺して漢軍を扶くと聲  
々に叫び人馬東西馳逐ふ元來夏侯惇の曹操が命を受け  
三万餘騎を卒して城外五里ばかりに陣を取けるが遙か  
城中の火を見付大軍を下知して許都の四方を取圍み一  
人も人を出さず自ら一手の勢を引て城中に入曹休に力を  
添て曉きまで戦ひければ歌紀韋晃等心許りの勇めども入  
替る勢なくして残り少なに討たされ金糧も吉選兄弟も早  
討れぬと告げれば事の解さるを見て城門より出走らんと  
するに夏侯惇が大軍四方を圍んで其密しき事水漏せとも  
通せず兎角する間に後より大勢追來り了に一人も殘らざ  
生掘城中の火を打消て回忠の者共の妻子一族を捉へ鄴郡  
へ早馬を立て曹操へ訴へければ曹操大いに怒り下知を傳  
へて回忠の者共を悉く市に出して首を討しぬ漢の舊さ  
百官を一人も都に留めず鄴郡へ召取ける夏侯惇生捕を引  
て大路を渡しければ歌紀聲をわけて罵り逆賊曹操我生て  
汝を殺す事能はず死して鬼とあり必らず賊を撃べきとぞ

呼ひりければ武士共を以て其首を討けるに罵る聲絶す  
再群兒に誤られたり云て失にける韋晃の頭を以て地を  
叩き牙を咬で齒牙尽く碎け恨むべしと叫んで了  
首を斬れけり夏侯惇五人の者どももの三旗を市に斬て回り  
ければ王必の肩を射られたる矢瘡重ふして了に叫び死に  
亡びける漢の舊き官人巳に鄴郡に下りければ曹操紅の  
旗を左に立白旗を右に立昨夜歌紀韋晃等郡の中に火を  
掛偏へ我を殺さんとす汝等諸々の官人定めて門を閉て  
出ざる者あらん又出て火を救はんとせし者もあらん火を  
救ふた者紅の旗の下に立若火を救ひざる者白の旗  
の下に立と鯛をしければ百官皆早く出て火を救ふたり  
と云ハ罪科あるまじと思ひ大半ハ紅の旗の下に集りけ  
り曹操ことごとく紅の旗の下ある官人を擲め捉ければ  
諸人皆罪なしと叫ぶ曹操が曰く汝等が心の火を救はん爲  
よあらず實ハ敵を助けて我を殺さんとせし者なりとて遠  
河の邊に引出して三百餘人が首を刎ね白旗の下に立た

る者の初めの如く都に回らしめ鐘鼓を相國とし華歆を御  
史大夫とし曹休を御林軍の總督とし侯爵を六等十八級に  
定め關西侯の爵十七級は皆金印紫綬なり又關内外の侯  
十六級を置是皆銀印緋綬黒綬なり五大夫十五級を定めて  
之皆銅印緋綬青綬なり官爵の次第を盡く定めて朝廷  
の官人を皆新し改め換萬づ意の儘に行ひ管轄が卜のよ  
く其驗あるを以て重く恩賞を與へしかども管轄取て之を  
受す

○瓦口關に張飛張郃と戦ふ

此時曹洪ハ五万の勢を率して漢中より到り夏侯惇張郃と共  
に要塞を守り兵を進めて下辨より向ふ兼てより張飛ハ巴西  
を守り馬超ハ下辨に向ひ吳蘭を先手として進む處に曹洪  
兵を引て進み來りければ吳蘭退かんとするも手下の大將  
任蔭が曰く今魏の勢遠く來る先其銳氣を挫かずんば何の  
面目ありて馬超を見んとて馬を飛して突て蒐りければ曹  
洪刀を舞して二人戦ひ三合ならざるに任蔭馬より斬て落

る魏の勢勝し乘て攻ければ吳蘭大いに敗れ回りに馬超  
よ見へければ馬超怒つて曰く汝我下知もあき敵を輕ん  
じて何ぞと斯ハ破れたる吳蘭が曰く任蔭某が命を用ひ  
ず此故に破れたり馬超が曰く只固く險阻を守り出て戦ふ  
事あるべからず本國へ人を遣し其消息を聞て後敵を破  
らんとて一人も出て戦はず曹洪も馬超が出ざるを見て計  
事あらん事を恐れ退いて南鄭に回りければ張郃申けるハ  
將軍巳に蜀の大將を討取あがら反つて退き玉ふハ何事ぞ  
曹洪が曰く我久しく馬超が出ざるを見るに恐くば深き計  
事あらん都にて管轄が卜に此處にて必らず一人の大將を  
失はん云り我此故に退きけり張郃大いに笑つて曰く將  
軍巳に五十に近き年をして卜を以て心を迷はし玉ふか某  
願くば兵を引て且巴西の敵を破らん曹洪が曰く巴西ハ  
蜀の大將張飛あり等閑の敵あらん張郃が曰く人皆張飛  
を怖るれども某ハ小兒の如くに存するなり必生取て  
持來らん曹洪が曰く若失ちあらん如何張郃が曰く明かに

軍法を正し玉へと云て了り三万餘騎を引て打て出三ヶ所に陣を張一ツの岩渠築と号し一ツの蒙頭築と号し一ツの礮石築と号し兵を分て守らしめ自ら一万五千餘騎を卒して巴西に推密ければ張飛之を聞て先手の大将雷同と計事を議するに雷同が曰く岡中の山岨しく地僻りて伏勢を用ふべし將軍自ら出でて戦ひ玉へ某奇兵を出して張部を手取にせん張飛之に従ひ精兵五千餘騎を雷同に授け自ら一万餘騎を引て岡中を三十里ばかり出ければ端なく張部が勢を行合兩軍相對して張飛馬を出しければ張部鎗を振りて突て蒐り戦ひ二十餘合に及びける時張飛が勢皆後より亂る元來雷同五千餘騎を引て谷の内に埋伏しけるが山々峯々に旗を指上げて敵の心を疑ひしめけるゆゑ張部後を遮られん事を恐れ急退んとするに蜀の勢前後より攻たりしかば魏の兵討る、者其數を知ず張飛終夜追て直ちに岩渠山に迫りければ張部陣中に透入堅く守りて出合ず張飛岩渠の陣を十里隔て陣を取れば張部高き山の頂に上り

鼓を打笛を吹酒を飲で更に下らず張飛兵に命じて散々に罵り辱めけれども張飛敢て出ざりければ張飛次の日雷同を遣して罵らしむるに張部山の頂に在ていよく下らず雷同腹を立兵を引て山に上らんとすれば大木大石雨の降が如くに抛落し蜀の勢矢庭に死する者十餘人雷同急退かんとする時礮石蒙頭の兩軍より魏の勢一度討て出散々々破る雷同大いに亂れて回りければ次の日張飛自ら推密様々に罵れども張部更に出せ只山の頂に在て張飛を笑ひ辱しめければ張飛すべき様あく相拒んで五十餘日に及び安からぬ事に思ひければ屹と計事を案じ出して山の前に陣屋を構へ毎日酒を飲で大いに醉山の麓に平座して様々に罵り辱しむれども張部敢て出ざりけり此時玄德の成都に居玉ひ張飛馬超が魏の勢と戦ふ由を聞て使を馳て軍の様を問玉ふに使回り張飛の唯毎日酒を飲で敵を欺くと告げれば玄德驚き孔明を召て此事を議し玉ふ孔明笑つて曰く彼地に恐くは美酒あるまじし成都の名酒五十樽を調

へ車三輛に載て早々に送り遣し張飛に之を飲しめ給へ玄德の曰く張飛元より酒を好んで動もすれば事を失る然るに美酒を送れとの何ゆゑを醉中必ず張部に害せらるべし孔明笑つて申けるは君の張飛と年久しく兄弟の交りを成玉へども其心を知給へば張飛日外蜀に入時顔面を釋して御方とせし如き人の勇夫の及ぶ所よわらず今又岩渠の山前に在て張部と對陣する事五十餘日近頃酒を飲で張部を罵り辱しめ傍若無人の体をなすの酒を食るにわらず乃ち張部を欺くの計事あり玄德の曰く若左様なる事も有べきかれども我心更に安からず魏延を遣して援けしめん孔明乃ち魏延に命じて成都の名酒を車に載黄なる旗をさして軍前公用美酒と書つけ送りて岩渠の陣に到らしむ魏延直ちに酒を賜ふよしを語りければ張飛拜して之を受け乃ち魏延と雷同とを左右の羽翼となし只軍中に紅の旗を動すを見バことごとく討て出よとて陣中酒を取散し相集りて笑ひ樂ひ張部此由を聞て山の上より遙に望めバ



張飛中軍に平坐して酒を飲み二人の童子も相撲を取せて  
戯れ居たり張部勃然として怒り張飛餘りに我を欺く今夜  
山を下りて討破るべしとて紫頭蓋石二ヶ所の勢を尽く出  
して左右は備へ月の明かなるに乗て直ち山を下り張飛  
が陣に打向つて遙く望み張飛猶中軍に在て酒を飲む張  
部喊を咄と造り鼓を打鐘を鳴して蒐入けるに張飛猶端然  
として動く事なく張部馬を躍らせ前に向つて一鎗に突通  
しければ人よへわらで取らて作れる人形なり大い驚き  
急よ退んとする時忽然として鉄砲響き一人の大將先よ  
進んで路を塞ぎ虎鬚倒し擧りて眼の百練の鏡に朱を洒  
ぎたるが如く叫ぶ聲の如くよして一丈八尺の矛を舞  
し燕人張飛此に在といふ儘に張部に討て蒐り二人火を散  
して四五十合を戦ひける左右に備たる紫頭蓋石二手の勢  
も魏延雷同に討破られて皆散々に逃走する張部は張飛と  
百餘合戦ひけるが山の上に火掛りて蜀の勢皆後へ廻りけ  
れバ馬を打て走るを張飛透間もなく追蒐了に三ヶ所に討

へたる張部が陣を攻取早馬を以て成都へ報じければ玄德  
限りなく喜び玉ふ張部へ残り少々に成て還々瓦口關まで  
落延討れたる者を數ふれば三方餘騎の勢已に二万余人の  
討れにけり斯くの叶ふまじとて曹洪は救ひを求めければ  
曹洪大い怒り汝我命を用ひぞ慙なる軍をして敵よ要害  
を奪はれたり今我汝を救ふ兵あり汝急ぎ敵を破りて本  
陣屋を取回せと責せれば張部驚き恐れ計事を定めて兵  
二手に分瓦口關の前に埋伏して我詐り負て引退れば張飛  
必ら追來るべし那時急に打て出敵の後を遮れと云合ぬ  
自ら一陣に進みければ蜀の大將雷同馬を飛して討て蒐る  
戦ひ二三合よして張部詐りて走りければ雷同逃さじと追  
來るに魏の伏勢一度に起りて其後を遮りしかば雷同驚い  
て退んとする時張部馬を引回して雷同を斬て落す張飛之  
を見て眼を怒し直ちに馬を交へて五六合戦ひければ張部  
又詐りて逃走する張飛計事なりと知て追ざりしかば張部又  
討て蒐る此の如くなる事三度に及びければ張飛敵の伏勢

ある事を知て本陣へ回り魏延を呼で申けるは張部伏勢を  
以て雷同を欺き殺して又我を欺んとす敵の計事に付て我  
反つて計事をなさん魏延が曰く如何ある計事を張飛が曰  
く我明日一軍を引て戦ひを初めん御邊へ精兵を引て山の  
際伏敵の伏勢我後を遮らんとするを見れば急兵を二手  
に分て之を防ぎ一手の手に乾きたる柴を積小路を塞いで  
火と付よ我必張部を擒にして雷同を仇を報すべし魏延  
計事を受て兵を揃へければ次の日張飛旦一軍を引て魏の  
陣へ推寄るに張部自ら馬を出し戦ひ十合餘りにして又詐  
りて逃走する張飛兵を驅て追蒐ければ張部心の儘に欺き奔  
山の腰を通る時一度に取て回して又戦ふ時に魏の伏勢左  
右より出て張飛が後を遮らんとするに思ひもよらず魏延  
が勢殺到し散々に打破りて谷の中へ追込柴の車を以て其  
細き路を塞ぎ一齊に火を付ければ火焰天を焦し山中の草  
木ごとく焼く黒煙の地に蓋ひ魏の勢一人もなく焼殺  
さる張飛勝に乗て勇み進みければ張部残り少々に討なさ

れ瓦口關に攀上り門を鎖して緊しく守る張飛魏延兵を引  
て推よせ數日攻れども要害險阻にして近くべき様なかり  
しかば張飛二十里退いて陣を取自ら數十騎を引て山路を  
巡り見るに或日男女打雜りたる百姓ども背に物を負て藤  
を樂葛に取付山を上りて去ければ張飛馬上にて鞭をわけ  
魏延よ向つて申けるは瓦口關を破る事只此百姓の身の上  
よわり汝等兵者共百姓を驚すことあく此所へ呼來れと云  
ければ須臾にして招き來る張飛問て曰く汝等如何なれば  
此山路を越んとする百姓答へて曰く某等皆漢中の者な  
るが今故郷へ回んとして此所へ來り本道よ合戦ありと  
承わり此故郷を越るに梓潼山の槍鉞川より漢中へ回  
り候張飛が曰く此路瓦口關と隔りけるか百姓答へて曰  
く梓潼山の小路は瓦口關の後を通せり張飛限りなく喜び  
本陣へ回つて酒を飲せ引出物を取せ魏延よ申けるは御邊  
の兵を引て瓦口關を攻蒐り玉へ我の百姓を案内者とし精  
兵五百餘騎を引て小路より後に廻らんとて共兵を揃へ

て出向ふ此時張郃ハ救ひの勢の來らざるを見て心の不安からざる所ハ魏延關を攻ると告げれば急ハ山を下りて戰ハんとするハ忽ち關の後より十方ハ火を掛て何くの敵とも知れず來れりと云て上を下へと騒ぎければ張郃ハ如何と驚き自ら兵を引て之を看るハ張飛旗を進めて眞先に馬を出す張郃前後ハ度を失ひ小路より走らんとすれば岩石多く登へて馬の蹄堪がたきハ張飛透間もなく追來る此故に馬を棄てて木の根岩の稜ハ掴み付て命を扶る者十餘人這々南鄭に回りければ曹洪大いハ怒り我再三出る事なかれといひしハ汝軍令狀を書て無用なる軍をして三方の兵を失へり尙よくも生てハ回りたるを云て引出して首を刎んとしければ行軍司馬の官に大原陽興の郭淮字ハ伯濟といへる者あり曹洪を諫めて曰く三軍ハ得易く一將ハ求む難し古人も詞を傳へたり張郃今罪ありとハ申せども元より魏王の愛し玉ハ大將なり暫く一命を扶け再び五千餘騎を授けて葭萌關を攻させ玉ハ、蜀の軍勢此關を固めん爲

く引回して漢中自ら平安ならん若又功を成ずんば二ツの罪を俱ハ誅し玉ハ曹洪實も同じ張郃が一命を扶けて又五千の兵を分與へ蜀の葭萌關へ攻か、らしむ

○黃忠嚴顏魏の兵を破る

去程ハ張郃五千餘騎を率して葭萌關ハ推よせければ關を守り蜀の大將孟達霍峻二人如何せんと議しけるハ霍峻ハ只よく守りて出る事なりるべしといふ孟達ハ早く打て出んと云て了ハ關を開いて出けるが孟達自ら張郃と戰ハ大いに破れて逃返る霍峻急ぎ成都ハ早馬を打て救ひを求めければ孟達之を聞て孔明と議し玉ハ孔明諸の大將を集めて曰く今葭萌關より急を告ぐ早く關中へ人を遣し張飛を召回して張郃を防がしめん法正が曰く張飛今瓦口關ハ兵を屯して關中を據守る是又第一の所なり若張飛を召回し玉ハ、必ず事の變わらん自餘の大將一人を擇んで張郃を防ぎ玉ハ孔明笑つて曰く張郃ハ魏の名將尋常の輩にあらず張飛より外ハ及ぶ者あらじ時ハ一人聲を勵して

曰く軍師如何なれば人を井の如くハ輕んじ玉ハ我等不才なりと申せども願くハ張郃が首を斬て獻つらん諸人之を看れば乃ち老將黃忠なり孔明が曰く御邊誠ハ勇ありとは云ながら年已に老たれば張郃が對手ハ不足あり黃忠之を聞て白髮皆倒ハ立怒つて申けるハ某年老たりとハ申せども臂ハ三石の弓を開き身ハ千斤の力あり何ぞ老たりとて用ひ玉ハぬ孔明が曰く御邊已に七十に近ければ誰か老たりと云ざるハ黃忠急ハ走りて堂を下り長き刀を取て水車ハ舞し掄動して飛が如く壁に掛たる硬弓を二張取て一度之を拽折ければ孔明が曰く御邊必らず行玉ハ一人の副將を伴ひ玉ハ黃忠が曰く嚴顏ハ某と共に老たり伴ひ行て敵を破り万一失ちあらば白髮の首を獻つらん孟德大いハ喜び然るべしと免し玉ハければ趙雲等皆諫めて曰く今張郃兵を引て葭萌關を攻む何故ハ此老人を用ひて小兒の戯れを爲玉ハ若葭萌關に失ちある時ハ蜀中危し若又張郃を破らば勢ハ乘て漢中を取べし軍師ハ

く之を察し玉ハ孔明が曰く汝等皆此二人の年老たるを以て輕んずる事なかれ我料るハ漢中を取こそハ只此二人が手の中にあり趙雲等之を聞て冷笑ひて退散す黃忠嚴顏二人兵を引て葭萌關に着ければ孟達霍峻等其年老たるを見て大いに笑ひ孔明ハ人を用ふる事を知玉ハ活る老人ハ戰はずとも死すべきに豈軍をして活る事あらんやと嘲りて關守の印を渡しければ黃忠嚴顏二人の旗を前する山の上立敵に其名を望み知しハ黃忠密ハ嚴顏に向つて申けるハ御邊諸人の氣色を見玉ハけるか皆我等二人が年老たるを笑ふなり不思議の功を立て諸人の目を驚すべしとて兵を引て出ければ張郃馬を出して大音あげ汝ハ其年まで世に在て猶羞をも知老陣前に出て戰んとするかと呼はりければ黃忠大いに怒り汝我年老たるを欺くか我手の中の刀ハ未だ年ハ密ぬぞ試みて廣言吐なと罵り馬を打て楚りければ張郃鎗を撚つて馳より二人戰ハ二十餘合に及びける時忽然として張郃が勢後より亂れ喊の聲地を震ふて嚴

顔が勢小路より廻り狭んで攻ければ張部大い敗れ八九  
 十里引退く曹洪又張部の敗れたる由を聞て急ぎ罪を正さ  
 んど怒りければ郭淮申ける今若罪を問んとせば張部必  
 ず蜀に降らん若ト別に大将を遣し相扶けて敵を防しめ事  
 の變を免れ玉へ曹洪之は従ひ夏侯淵が姪の夏侯尚に韓玄  
 が弟の韓浩を副て五千餘騎を興へ行て張部を扶けしむ張  
 部新手の加へりたるを喜び諸將を集めて相談し黄忠年老  
 たりと雖も甚だ以て英雄なるに又嚴顔力を助けて輕々し  
 くへ戦ひ難しと云ければ韓浩が曰く我長洲に在し時よく  
 黄忠が舉動を知り魏延と共に心を合して我兄を殺せし奴  
 なり今幸ひに此所にて出合たり必老仇を報すべしとて夏  
 侯尚と新手の勢を卒し陣を張て敵を待黄忠は毎日其邊の  
 地理を見廻りけるに或時嚴顔申ける此所よ天湯山とい  
 へる山あり乃ち曹操が軍糧を貯へて長久の計事をなす所  
 あり若此山を攻取れば魏の勢皆漢中に留る事能はじ黄忠喜  
 んで此計事我心に合へり簡様くにし玉へと低語ければ

嚴顔よく計事を約し自ら一軍を引て打向ふ黄忠は夏侯尚  
 が密るを聞て兵を揃へて待ければ魏の陣中より韓浩眞先  
 ろ進み出大音あげて黄忠無義の逆賊何くよかを罵り鎗  
 を振りて蒐りければ黄忠刀を舞して向ふ所に夏侯尚又討  
 て出来んで攻ければ黄忠暫く支へて防ぎ戦ひ詐り負て逃  
 走る夏侯尚兵を駈て二十里餘り追りけ黄忠が陣屋を奪ひ  
 取ければ黄忠又仮に陣屋を造りて兵を屯す次の日魏の勢  
 大いに進みければ黄忠打て出て暫く戦ひ又打負て逃走る  
 夏侯尚韓浩二十里餘り追かけ又黄忠が陣屋を奪ひ取張部  
 を呼んで跡の陣を守らせければ張部諫めて曰く黄忠二日打  
 負たるの必ず詭りの計事をらん輕々しく追玉ふも夏侯尚  
 叱つて曰く汝が如き臆病ものが敵を怕れて岩渠山の陣屋  
 を破られ多くの人馬を失ひて見苦しき羞を被る只口を開  
 て我功をなすを見物せよと云ければ張部顔を赧して退き  
 ける次の日魏の勢推寄せければ黄忠又破て二十里餘り退き  
 毎日打負て散々に走り葭萌關に入て敗て出ざりしかば夏



侯尚兵を引て關前に陣をとる孟達此体を見て密に早馬を  
 飛して黄忠が累りに打負て五ヶ所の陣を敵に奪はれたり  
 と報じければ玄德大いに驚き孔明を召て問玉ふ孔明が曰  
 く之ハ黄忠が驍兵の計事なり少しも驚き玉ふ事なかれ趙  
 雲等敢て信なりとせざりしかば玄德も心の中安からず劉  
 封一手の勢を付行て黄忠を援けさせらる劉封已に葭萌  
 關より到りければ黄忠問て曰く何故に來り玉へる劉封が曰  
 く我父將軍の打負玉ふ由を聞て某に命じて援けしめ玉  
 ふ黄忠笑つて曰く之ハ老夫が驍兵の計事なり今夜一戦に  
 悉く敵を破るを見玉へ陣々を皆取返し敵の棄たる兵糧物  
 の具を奪取ん我數日詐りて負たりしハ五ヶ所の陣屋を敵  
 り借て飽まで兵糧の類ひを籠させ一夜の内より取ん爲なり  
 葭萌の關門を守り孟達ハ春に取兵糧を運び玉へ劉封ハ我  
 自ら敵を破るを見玉へとて其夜の二更に自ら五千餘騎を  
 率して直ち門を開いて討て下る魏の勢ハ數日敵の出さ  
 るに油斷して悉く睡り居たる所に思ひも寄す黄忠が五千



餘騎を咄と作りて太山の崩るゝ如く散々に放たりけれ  
ハ上を下へと騒動して或は鼓も亦弓に矢をはげ縛ける  
馬よのりて我一人のよと争ひ人馬踏殺さる者其數を知さ  
夏侯尙と韓浩と歩立に成て辛き命を扶かりけるが一夜  
の合戦に三ヶ所の陣屋を攻取れ討れたる者麻の如し黃忠  
の敵の貯へたる兵糧武器を取て孟達に運び入させ思をも  
繼す兵を進めければ劉封が曰く手下の勢皆疲れたり暫く  
此にて休むべし黃忠が曰く古より虎穴に入らずんば獲ん  
ど虎子を得んと云り身を捨ててこそ手柄をも高名をもせり  
續けや兵者として自ら先進めば五千の精兵飛が如くに  
追かけ其勢以甚だ銳なれば魏の勢大いゝ亂れて一支へも  
支へざる互ひに自ら衝動して死する者數を知さ數ヶ所の陣  
を打すて漢水の邊まで落延張郃と心付て夏侯尙韓浩を  
奪ねてやけるハ天陽山の御方の兵糧を貯へたる所にて米  
倉山に打續き昔之漢中の軍士一命を寄る所なり若此所に  
失らわらば漢中自づから破るべし夏侯尙が曰く米倉山に

ハ再叔の夏侯淵大軍にて陣をどり定軍山に續きたれば少  
しも憂る事あかるべし天陽山にハ吾兄夏侯德兼てより陣  
を取我等も行て一手よなるべしとて張郃韓浩と共天陽  
山に到り夏侯德に見へて黃忠騎兵の計事を用ひて吾等を  
關の前より帯さず勢ひに乗て打て出しゆゑ其鋒當るべから  
ず終夜退れて許多の兵糧武器を打すて此所まで來れりと  
云ければ夏侯德が曰く此山に十万の兵あり汝之を分て再  
び推寄原の陣屋を取返せ張郃が曰く只固く守りて出る事  
かく敵の糧を以玉へ其詞未だ終らざるに忽然として賊  
の聲響さ城の聲地を屬ひ追々人走り來て黃忠攻陥るも  
ぎければ夏侯德笑つて曰く黃忠更に兵法を知ず只一勇の  
力のみ張郃が曰く必ら走傷り玉ふも黃忠ハ智勇共に備れ  
り夏侯德が曰く蜀の勢遠路を越て終夜疲れたり然るに輕  
々しく重地に入此計事を知ざるなり張郃が曰く必ら大い  
なる計事あらん只よく守りて出べからず韓浩が曰く 某  
願くハ三千餘騎を借て老將が首を取ん夏侯德然るべしと

同じければ韓浩兵を引て山を下り此時日已に西山に落け  
れども黃忠糧兵を進めければ劉封諫めて曰く日も已も暮  
の軍勢も疲れたり長追ハ無用なり黃忠冷笑て曰く昔哲ハ  
ハ時に順つて動さ智者ハ機を見て發す今天我を助けて不  
思議の功を興ハ玉ふ取ざるハ是天に逆ふありとて薄地暗  
に上り鼓を打て喊を作りければ韓浩三千餘騎を率して坂  
中に防ぎ自ら馬を出しければ黃忠刀を舞して打て苑り只  
一合にして韓浩を斬て落夏侯尙此由を聞て急に兵を引て  
來りければ俄に山の後より喊の聲天地を碎き陣々に火を  
掛て一手の勢討て出たり夏侯德大いに驚き自ら出て火を  
敷いんとするに嚴顏刀を舞して打て苑り夏侯德を馬より  
下に斬て落す去程に火焰山谷に滿て黃忠嚴顏前後より攻  
めければ張郃夏侯尙防ぐこと能はず殊に夏侯德韓浩が討れ  
たるを見て諸軍力を失ひ我先に逃走りければ天陽山を  
打とて定軍山に落集り夏侯淵と一手になる黃忠嚴顏十分  
に打勝成都へ早馬を馳て右の趣らとを報じければ玄徳限り

よく喜び諸大將を集めて喜びと述玉ふ時ハ法正進み出で  
曰く昔曹操が一敵に張郃を破りて漢中を平けし勝其勢ひ  
に乗て蜀を攻る事を成す夏侯淵張郃二人を留めて漢中を  
守らしめ自ら都に返りし者ハ其志の及ばざるみわらず  
力の足ざるに依てなり今曹操の中に内變ありて自ら外  
へ出る事能はず況んや夏侯淵と張郃とが才略誠に國の將  
帥とするに勝らず若蜀の大軍を起して君自ら攻苑り玉ハハ  
漢中を取ん事 掌を反すよりも易し事定りて後兵糧を貯  
へ士卒を養ひ玉室を奪んで固く險阻を守り曹操を圍むの  
久計をなさん時天の興ふる時節失ふべからと勸めけれ  
ば玄徳實も同じて即時ハ十万の勢を起し日を擇んで打  
起玉ふ

○黃忠夏侯淵と賊と

時に建安二十三年秋七月の吉日に玄徳十万の勢を起し趙  
雲を先手として葭萌關に出陣をとり使を馳て黃忠嚴顏  
を呼寄重く恩賞を賜ひ人曾汝二人を老武者とて倚りしが

孔明獨其能を知て敵軍に向ひしむるは果して世に罕ある功を立たり漢中の定軍山の乃ち南鄭の要害敵の兵糧を集めたる會源なり若此山を取れば陽平の一道の心を掛ること有べからず汝之を取べきかと問玉ふに實忠欣然として領承し兵を引て州としければ孔明が曰く御邊賊に勇なりと雖も夏侯淵の對手にあらざる夏侯淵の深く智略に通じて善兵を用ひ機を曉る曹操此故に西涼の鎮守とす今漢中より出て陣を取もの曹操よく夏侯淵が大將の才ある事を知り御邊已に張郃に勝玉へども夏侯淵に及ぶまじ早く荆州へ代りの大將を遣し關羽を招きて夏侯淵を戦ひしめん曹忠奮然として答へて曰く昔藤原の年八十に及んで猶米一斗肉十斤を食ふ天下の諸侯之を怕れて敢て趙の界を犯さず況んや某未だ七十に及ばず何故に老たりとて輕んじ玉ふぞ某只一人三千餘騎を引て必らず夏侯淵が首を取らん孔明更に許さざりしかば曹忠再三行ん事を求む孔明が曰く御邊強て行玉の法止を監軍として伴ひ行萬づ相

議して輕々しくする事亦かれ我及兵を以て援くべし實忠大い喜び兵を引て出ければ孔明密に玄徳に向つて申ける此老將の詞を以て激さされば行ても功をなす事能はぬ今已に打立て候又兵を分て援くべし玄徳然るべしと問玉へば孔明即ち趙雲に申ける御邊の一手の勢を引て小路より奇兵を出して實忠に力を添玉へ實忠若打勝れば必ず出玉ふ事なれば彼が食色になりたるを見玉の速かに出て救ひ玉へ又劉封孟達共に三千餘騎を引て山中の險阻ある所に多く旗を立て味方の勢ひを壯んよし敵の心を疑ひしむべし又關羽の巴西關中に行て難所を守り張飛魏延に代りてよく固め張飛魏延に還りて漢中を取しひべし又下辨へ人を遣して馬超に我計事を傳へしむべしとて半分已に定りければ思ひく打立けり去程は張郃夏侯淵の天蕩山を追落され定軍山より來りて夏侯淵に見へ味方大將を討れ軍士を損つたるに玄徳自ら蜀の大軍を起して漢中を取んとす早く魏王に救ひの兵を乞玉へと云け

れは夏侯淵大いに驚き先此由を曹操に報ず曹洪早馬を飛して都へ告げれば曹操之を聞て急き文武の大將を集めて相議するに長史劉曄が曰く漢中の土肥民殷にして眞に國の藩屏なり若一度破る、時の都の内應動せん大王勢を憚らず御親自ら征伐し玉へ曹操が曰く我當初汝が首を用ひせ今之を後悔せとて即時に四十万の大軍を起し七月に都を立て九月に長安に至り兵を三手に分て自ら中軍に備へ夏侯惇を先手とし曹休を後陣とし曹操の白馬馬にのり黄金の鞍を備へて玉の轡をとり錦の袍を着たる武士手に江羅の傘蓋を捧げて左右に金瓜銀鐵才手をさしあげ天子の鑾駕を備へて龍鳳日月の旗を立龍虎の官軍二万五千五手に分れて皆五色の旗を按じ其勢ひ遠近を拂つて已に逆關まで打出遙く樹木の茂りたるを見てわれ何くぞと問ければ近侍の者答へて曰く之の藍田と申す處にて林の内乃ち蔡邕が山庄よて以曹操昔蔡邕と交り深かりしが其女蔡琰と云し者術道玠に嫁しけるが北虜琵琶に生取れ

て胡の爲に妻とせられ後に二人の子を産りされども住馴し故里を離れて沙漠不毛の國に捉れたれば涙の乾く暇もあく常に胡の弄ぶ笛といふ吹物を聞て郷思の悲み絶えず自ら十八曲を作りけり此曲相傳へて中國は流布しければ曹操之を聞て深く憐れ思ひ魏國に人を遣し千兩を金を以て蔡琰を買ける胡の左賢王原より曹操が勢ひを怕れて卒に蔡琰を回しける曹操則ち董記といふ者一與へて妻となしたりけるが此日蔡邕が事を思ひ出し大軍を先よ進め自ら近習の者ども百騎ばかりを引て董記が宅に至りければ此時董記の外に出てあり合す妻の蔡琰ばかり居たりしが曹操が來れると聞て急し自ら出迎ふ曹操堂に上りて坐し壁に一つの碑の文を書し喬軸あるを見て之の如何なる物ぞと問ければ蔡琰答へて曰く之の曹娥といひし者が碑の文よて昔し和帝の朝に會稽の上虞といふ所よ一人の師巫あり名を曹肝といふてよく蔡邕の神樂をなす五月五日酔て舟の中よ舞けるが失つて江よ落水に溺れて

死して其女年十四歳なりけるが江を遶りて哭き哀しむ事七日七夜なり卒に身を投て淵に沈みけるが後五日を歴て自ら父が屍を賃て江に浮べり里の者ども之を怜んで岸の邊に葬りて程經て上流の令度尙といふ人帝に奏して孝女なりと邯鄲淳に文章を作らせ石を刻んで其事を記す時に邯鄲淳の年備十三歳ありしが筆を揮ふて此文を作り再び一字を改めずとかや我父蔡邕此由を聞て遙に行て其文を看んとするよ日已に暮て昏かりしかば手を以て石を摸其刻める筆畫を探りて之を讀筆を求めて字を其後に書付しを後の人卒に石に刻り之の父が書たる筆の跡にて候と語りければ曹操後に書たる八字を看るに黃絹幼婦外孫豎石とあり乃ち蔡琰に向つて汝此意を知たるかと問ふ答へて曰く父が書たる字にて候へども妾未だ其意を知り候はず曹操諸々の大將に汝等知たるかと問に皆首を低て答ふる者なし其内一人進み出某已に此意を知りといふ者あり諸人之を看れば主簿楊修字の徳祖なり曹操が

曰く汝暫くいふ事なかれ我工夫して曉るべしとて馬に乗て出けるが三里餘り來りて忽ち悟り笑つて楊修と問て曰く汝試みに云候へ楊修が曰く之の隠し詞にて侯黃絹ハ乃ち色の絲之絶の字なり幼婦ハ乃ち少き女之妙の字あり外孫ハ乃ち女の子之好の字あり豎曰ハ乃ち辛さを受る器物之辭の字なり之を総て絶妙好辭の四字となる之ハ邯鄲淳が文を贊じて絶れて妙なる好辭なりと美たる意よて侯曹操大いに愕き孤意も此の如しとて直ちに南鄭に至りければ曹洪出迎へ先張郃が暫々討負たる由を語ると曹操が曰く是張郃が罪よわらば勝負ハ武士の常の道なり曹洪が曰く玄徳自ら大軍を起して黃忠よ定軍山を攻させ候へども夏侯淵大王の來り玉ふと聞て固く守つて出合ず曹操が曰く若出て戦はざる時は應せるよ似たり早く使節を馳て令を傳へ快よく出て戦へし劉璋謀めて曰く夏侯淵ハ性急にして甚だ剛なり恐くハ敵の謀事に陥入ん曹操聞ず手つから玉命を寫して定軍山へ使を遣しければ夏侯

淵披を見るよ其文よ曰く詔して夏侯淵に示して之を知しんを將たる者ハ當よ剛柔を以て相濟ふべし徒に其勇を恃むべからず然れども將としてハ固に當よ勇を以て木となし之を行ふよ智計を以てすべし若但勇に任す則んば愚夫の敵のみ君今大軍を南鄭よ屯して卿が妙才を觀んと欲す二字を辱しむる事なくんべ可なり(妙才ハ淵の字なり)夏侯淵見りて大いよ喜び重く使を持成して即時に兵を調へて張郃よ申けるハ今魏王の大軍南鄭に屯し某に命じて敵を討しめ玉ふ我久しく此處を守つて一度も葛々しき勝負をせず明日自ら出て快よく戦ひ先黃忠を以て取べし張郃が曰く必らず輕々しく出玉ふな黃忠ハ智勇ともよ備りて事よ法正よく計事をなす此所幸ひに要害よけれハ唯固く守りて出玉ふ事あかれ夏侯淵が曰く我久しく此所よ在ながら若他人に功を奪はれなば何の面目ありて魏王よ見へんや御邊ハよく此所を守り給へ我は山を下りて

戦はんとて諸軍よ向つて問て曰く誰が先手に進んで敵のやうを伺はん夏侯尙が曰く某願くを行ん夏侯淵が曰く汝先手よ進んど欲せば黃忠と鋒先を交へ詐り負て引退け我深き計事あり必らず黃忠を擒にせん夏侯尙其命に従ひ三千餘騎を引て山を下る此時黃忠ハ兵を引て法正と定軍山の麓に押寄數日戦ひを催すに魏の勢固く守りて出ざりければ直ちに攻上らんとすれども山路甚だ峻嶮よて敵の計事も知がたければ只麓に陣を取居る所に斥候の士卒山の上より魏の勢來ると報じければ黃忠自ら出んとするに大將陳式進み出て曰く老將軍何を自ら此敵に當り玉べき某願くハ千餘騎を引て後の細路より山に上り兩方より狭んで之を討ん黃忠然るべしと誦しければ陳式山の後より賊を咄と作つて攻上り夏侯尙と鋒先を交へて戦ひけるが夏侯尙詐り負て逃走る陳式勝よのつて追かけしかば黃忠其計事を悟り急よ路より進みけるに山の上より大木を投落し鉄砲を打出しければ更よ進むこと能ハ

老陳式も半途より引回さんとする夏侯淵勢ひも乗て追  
かけ卒に陳式を生捕ければ手下の勢ごとく魏に降る  
黃忠此由を聞て大い驚き法正と議しければ法正が曰く  
夏侯淵ハ性甚だ躁しうして只一勇の力を頼む今味方の兵  
者を屬して次第く陣屋を造り山の下に近づきさあば夏  
侯淵必らず山を下つて齊來るべし之反客爲主の計事  
なり凡そ坐が敵を拒げば逸を以て勢を討なり寄手ハ弱  
くして拒ぐ方ハ強し夏侯淵若來らば我必らず生取ん黃忠  
之に従ひ諸軍恩賞を與へて其志を勵し自ら進んで陣  
屋を作り數日住りて又進んで陣屋を造り一營く相續い  
て次第に山に近付けければ夏侯淵之を望み自ら出て戦ん  
とす張郃が曰く之ハ反客爲主の計事なり必ず輕々し  
く出玉ふな戦ふ時ハ失わらん夏侯淵史に用ひ老夏侯尚  
に命じて出て戦はしめ數千の兵者を卒して晩方に黃忠が  
陣に押寄せければ黃忠刀を提て出迎へ夏侯尚と馬を交へ  
て只一合に生取れ魏の勢遂回つて夏侯淵に告げれば夏

侯淵急ぎ黃忠が陣へ人を遣し陣式未だ生て此處にあり願  
くバ夏侯尚と換んとひひ送りけり黃忠乃ち明日陣前に  
て互ひに快よく換んと答へ次の日兩軍皆山際の廣き所に  
出て陣をはる黃忠も夏侯淵も自ら馬を出して問答し兩方  
の生取を引て皆甲を被す一度に聲を合せて各々走り回り  
けるに夏侯尚已に本陣に入んとする所を黃忠弓を引て兵  
と射る其矢夏侯尚が脊中に中りて地上に倒れければ夏侯  
淵大いに怒り馬を飛して黃忠を討てか、り二十餘合戦ふ  
所に忽ち魏の陣に金を鳴して兵を收めければ夏侯淵心  
驚き急に退き歸らんとするを黃忠勢ひも追かけしかバ  
魏の兵討る、者數を知老夏侯淵本陣より何とて金を鳴  
したると問ければ四方の山の間多く蜀の勢の旗あり恐  
くバ伏兵あらん此故軍を收めたりと答ふ夏侯淵實もと  
同じて固く守つて出合ず黃忠ハ定軍山に迫りよせ法正と  
計事を議しければ法正手を以て教へて曰く定軍山の西に  
巍然として高さ一ツの山あり四方皆險阻にして容易の上

り難し若此山を攻取らば定軍山の敵軍を思ふまゝに窺ひ見  
ん然る時ハ定軍山を取ると又掌にあり黃忠之を仰ぎみ  
るも其山甚だ高ふして頂き稍平かに僅の敵此を固めたり  
と見へければ其夜の三更に黃忠兵を引て金を鳴し鼓を打  
喊を作りて攻上る元來此山に魏の副將杜襲といへる者  
數百の勢にて守りけるが蜀の勢大軍にて上るを見て一支  
も支へず遂に山を棄て走りけり黃打遂に山を攻取定軍山  
と相双びたれば敵の虚實を思ふまゝに窺ひける法正が曰  
く夏侯淵若來らば味方兵を制して敢て動かさ彼が退い  
て回る時我白き旗を揚べし是則ち以て逸待の勢なり反りて  
て蒐り其備なきを攻玉ハ是則ち以て逸待の勢なり反りて  
大將を害すべし黃忠是に従ひ次の日山の半多く旗をた  
て鼓を設けて敵の來るを窺はせけるる程に杜襲逃返つ  
て敗軍の様を告げれば夏侯淵怒つて曰く黃忠我對山を取  
て陣をひる我速かよ打破るべし張郃諫めて曰く今山を  
取ハ乃ち法正が計事なり將軍必らず出玉ふ事あかれ夏侯

淵が曰く黃忠山の頂より我陣の虚實を見賺す安んぞ  
之を打破らざるへき張郃再三諫むれども夏侯淵卒に聞ず  
兵を半分止めて本陣を守らせ自ら黃忠が陣に押寄せ山の  
麓より扣へて辰の刻より午の下りまで散々に倒れども黃忠  
更に山を下らず法正頂より望み見るに魏の勢皆倦疲れ  
て大半の馬上より眠りなんとしければ白き旗をさつと指  
上たるに山上の軍兵一度に鼓を鳴し角を吹き喊の聲大い  
く響いて潮の湧が如くに討て下り黃忠一騎其先を進んで  
天明れ地沼の勢ひ直ちに大勢の中を地通りけるも魏の勢  
荒けて散々に亂れしかバ黃忠刀を舞して夏侯淵が首よ  
り肩をかけて眞二つに斬て落す魏の勢互ひに震動して右  
往左往に逃ければ黃忠勝に乗て定軍山を攻上るに張郃生  
手を引て防ぎ戦ふ黃忠陳式兵を二手に分兩方より攻しか  
バ張郃卒に敗れて本陣へ回らんとするに忽然として山の  
傍らより一彪の軍馬打て出大將一騎其先に進み大いなる  
旗をあげたりければ張郃屹と見るに常山の趙雲と大文字

に書付たり張邵いよく驚き進退門なく路を奪ふて退か  
 んどすれバ向より杜襲敗軍を引て逃來り定軍山の本陣を  
 唯今劉の大將劉封子進は奪られたりと申す張邵力を失  
 ひともし漢水に出陣を取れば杜襲が曰く夏侯淵討れ  
 て此陣に大將軍なし然る時ハ人の心も變を生ぜべし御邊  
 假に都督の印をかけて人民の心を安んじ玉へ張邵實もど  
 て早馬打て急を告げれば曹操夏侯淵が討れたるを聞て大  
 いに哭き始めて管轄がいひしトを信じて自ら其詞を思  
 ふに三八縦横といひしハ乃ち建安二十四年なり黃猪遇  
 虎との乃ち年巳の亥にあるなり定軍南傷二折一股と  
 ハ乃ち曹操と夏侯淵と兄弟の情あるゆゑなり眞に希有の  
 神トありとて人を遣して管轄を尋ねしむるに已に行方あ  
 く出去にけり

繪本通俗三國志卷の三十終

繪本通俗三國志  
 繪本忠義水滸傳

旧本五十冊  
 新本十五冊  
 旧本八十冊  
 新本十六冊

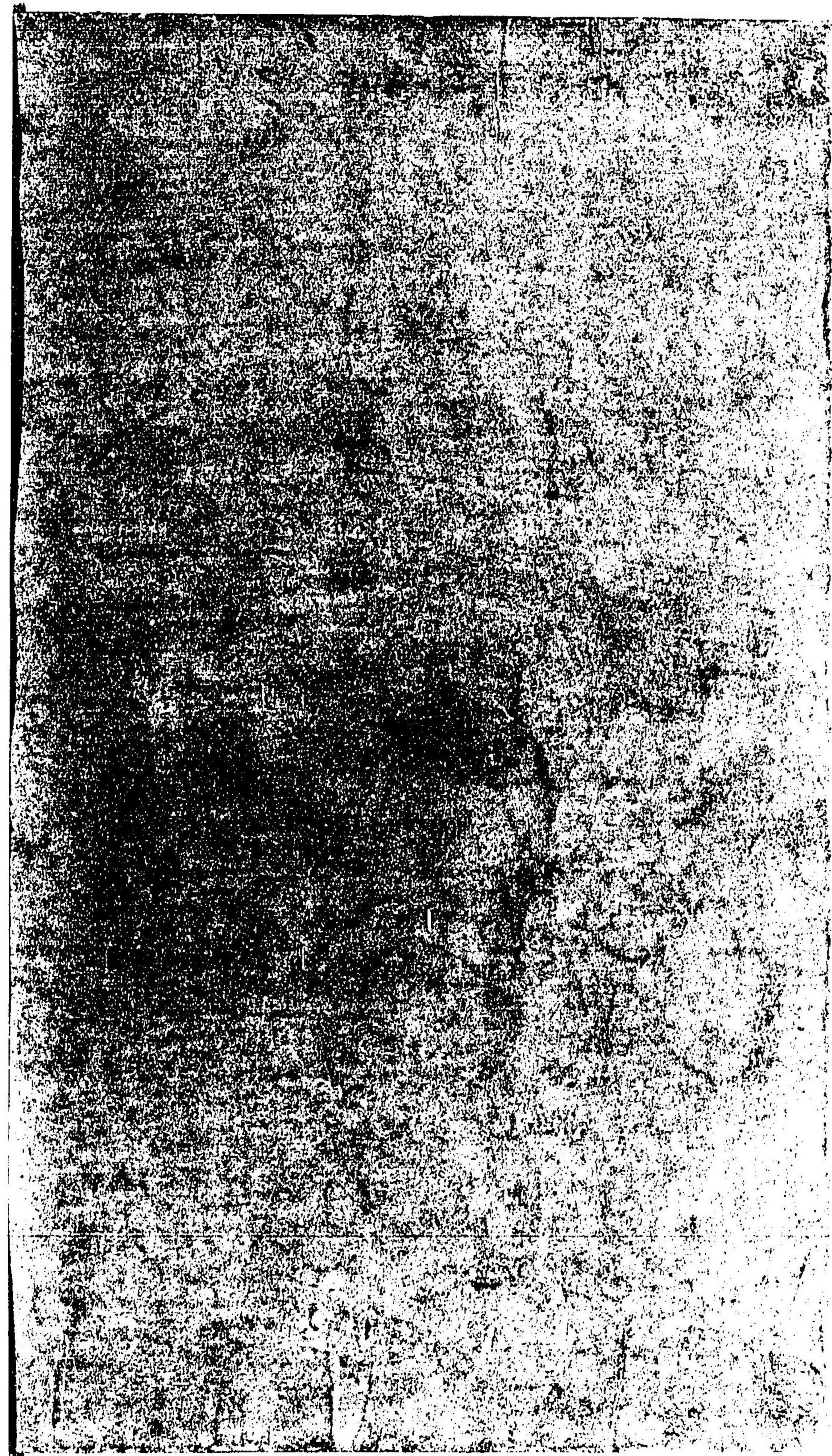
該二書毎月一冊ツ、發兌各定價金三十錢  
 前金御申込、諸彦ハ賣渡金二十錢ニテ出版  
 ノ都度配付仕候也 但シ府外ハ郵税六錢申渡  
 府下賣捌所ハ茲ニ略スマテ御最寄ニテ御求ノヲ乞フ

定價三十錢

明治十六年十二月十七日出版御届

和解者美  
 出版人

東京府平民  
 清水市次郎  
 著  
 可樂堂



特40

21